
吸血鬼の真祖と神（魔王）候補の転生者

クロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血鬼の真祖と神（魔王）候補の転生者

【Nコード】

N1012Y

【作者名】

クロ

【あらすじ】

目が覚めたら出てきたのは、いかにもな感じの神様。え？神になれって？・・・むしろ魔王？・・・そんなこんなでチートを引っ提げて魔法先生ネギま！の世界に武力介入！主人公（女）が欲望やら本能やらに忠実に好き勝手暴れまわるそんな物語。

『注意書き』

・本作品はチート転生モノです。主人公最凶です。戦闘で苦労とかしません。ご都合主義です。合言葉は「粉碎！玉砕！大喝采！」です。

- ・ ガールズラブ、ハーレム要素があります。
- ・ 原作主人公他に対するアンチ要素があります。
- ・ 原作ルートがブレイクされます

以上のような表現が嫌いな方は戻るを推奨します。

第1話 真っ白？神様？チート？テンプレです

「……………」

やあ皆さん。おはよう・こんにちは・こんばんは。しぎげんよう。

私はしがない小市民A（女）よ。

え？なんで名前を名乗らないって？

だって私、名前だけ記憶が無いのだから。ついでに体もない。

気が付いたら辺り一面真っ白な空間。

自分はふわふわ浮いた光の玉みたいになっでいて。

あ、ちなみに動ける。現在進行形で飛んでいる。

ふう……これはあれね。

私の大好物である二次創作系の出だしね、わかります。

まあ、読むぶんには良いのよ？

ただね、実際自分がなってみると、やることはひとつ。

動きを止めて、すうっと大きく息を吸い込んで（肺どころか体無い
んだけど）

「「ゴゴゴ」……！私はだれ……！」

「ふう……酷い目にあつたわい」

そう言いながらイスに腰掛ける白い髪に白いお髭、白い服の如何にもなお爺ちゃん。

「神にダメージ与える一般人なんぞ、そうはいないぞ」

実は全身にダメージを負っている。

この光る玉、物理的ダメージ与えられるのね。

具体的には、某超野菜人の何番目かが「チョコになっちゃえ〜」でチョコになり、チョコにした相手をボコボコにした感じ。

さすがに喉は突き破ってないわよ？グロイし。

そんな訳で、部屋に入ってきた神様に開幕速攻でOHANA
SHIを発動させた私。

今は机を挟んで、対峙しています。

「それで、どういうことなのかしら？」

「ん？まあ、簡単に言つとじやな・・・お主、神にならんか？」

「・・・・・・・・そういうお誘いは、美人な女神様とかの方が私的には嬉しいのだけど。具体的には主神に仕える三女神とか。」

「いやいや・・・別に最終戦争起こすわけでもないし起こつてもおらんから。当代の天界の主・ゼウス様と魔界の主サタン様、親友じやから」

ちよ、え？親友つてなにそれ。天国と地獄・・・じゃなくて魔界つてもっとも相容れない存在じゃないの？

「天界は理性を徳として、魔界は本能を徳とする。それだけじやよ」

「・・・・・・・・ナチュラルに思考を読まないでちょうだい」

「それでも神での・・・というよりお主、思ったほど取り乱さないの」

「何を白々しい。記憶の欠落、体を改造？までしておいて。大方話をしやすいように、理解力やらも手を加えているのでは？」

「本当に恐ろしい奴じやな」

「それで？神になるとは、どういうことなのかしら？」

「うむ、この世には天界と魔界が1つずつ存在する。それぞれを絶対神・ゼウス様と大魔王・サタン様が治められていて、その下にワシのような神や、魔王が存在する。その更に下が天使や悪魔じゃな」
魔王が複数つて・・・世の中の勇者様？泣いちゃうよ？

「そして神や魔王が管理する人間界が数限りなく存在する。そなたら人間の言葉でいえば、並行世界、パラレルワールド、外史などじゃな」

本当にあるのね、並行世界。これは神様に頭弄って冷静でいられるようにしてもらって正解ね。ご都合主義感謝。

「最近、その人間界の数が急速に増加し、神や魔王の手に余る事態が生じてきたのじゃ」

「それで私を神に？というか神ってそんなに簡単になれるものなの？」

「普通は無理じゃ。そもそも天使や悪魔は、人間が輪廻の間に魂を鍛えてなるんじゃ。これだけで軽く500年。まあ人生5回転生したらなれるかも？くらいじゃな。その後、より多くの時間を賭けて神や魔王にレベルアップ・・・というのが基本の流れじゃ」

その間にも新しい世界・新しい命・新しい魂が生まれるから、天使や悪魔が増えても普通の人間が減る事はない、と。それにしても、無から有を生み出しまくってない？真理に喧嘩売ってない？あの黒いによるによる出てきちゃうよ？

「ところが極希に、突然変異していきなり神や魔王クラスの格を得る魂があるんじゃない。それがお主じゃ」

おおっと。眠りについた神や魔王の魂とかそんな流れすらぶった切ったよ私の魂。突然変異っておい。

「まあ、人手不足に加えて私がそれを手伝う資格があるのは分かったわ。それで具体的には何をさせたいの？」

「最初の数回は人間界の1つに行ってもらおう。そこで管理者として物語の終わりまでを見届けてもらう。慣れてきたら複数の世界を管理してもらうことになるじゃろ」

「物語？」

「世界、つまり人間界には何かしらの目的、物語がある。お主のよく知る二次創作のように、原作を物語にしていたり、お主の居た世界のように科学技術が発展しすぎて最終的には人類自滅・・・という物語もあるの」

おい！自滅って！ただの滅亡よりたち悪い！人類自重しろ！核？核なの？

「まあ実際には、静観し事態の推移、物語をただ眺めるもよし。一部の例外を除けば、積極的に介入して原作ブレイクをするもよしじやよ」

「自由なのね」

「管理者のスタイルはそれぞれに委ねられておる。必要なのはどん

な形であれ物語を進める事。世界が増え続けると最終的に全部混ぜたり合って消えてなくなるからのう」

「・・・なんかとんでもないこと聞いた気がするけど流すわね。それより質問んだけど、天使や悪魔になる条件って？」

「生前に理性と本能、どちらを優先させたかじゃな。理性ならば善を積み天使に近くなり、本能ならば悪を積み悪魔に近くなる。そのまま何回も転生すると天使や悪魔になる。まあ、ここでの善悪は一義的ではない。悪といっても犯罪行為から色欲・強欲などまでピンキリじゃよ」

「・・・私の性格やら性癖的に魔王の方がいいんじゃないかしら？」

「それなら心配ない。今のお主は、魂の格は手に入れたが善悪どちらにも染まっておらん。数回管理を続けるうちにどちらかに染まるじゃろ。その結果悪に染まるなら魔王として魔界で暮らすことになるう。」

「あれ、いいの？というか魔界ってどんなところよ？」

「わしらにしたら管理者が増えればそれだけ負担が減るのでな。神であろうと魔王であろうと関係は無いのじゃ。天界と魔界の関係も良好じゃしの。魔界も、犯罪を犯した者の転生先としては文字通り地獄じゃが、色欲程度ならむしろ願ったりかなったりじゃないかの？」

「・・・何だか、都合の良い想像をしてしまったのだけだ」

「生前色欲の強かった者なら、その魂は大抵夢魔の下へ送られるの。」

そこで毎夜くんずぼぐれつ・・・」

「さあ！きりきり話を進めましょうか！」

「お主、存外分かりやすいのう。まあ魔界の方には女の色欲系魂が多く行きそうだと言っておこうかの」

「ちょっと！確かに私は自称真性のレズビアンでドのつくサディストだけでも、とつかえひつかえなんかしないわよ！」

「少しはオブラートに包むとかしないのかの？というか自称？」

「別に隠すほど恥ずかしい事じゃないもの。まあ変わっているとはよく言われるから認識はしてるけど。自称はまあ、本気でその道進む人には鼻で笑われるような・・・あくまで一般人基準での、という意味を込めてよ」

「まあそれはそれとして・・・女だらけの孤児院で育ち、女子高・女子大出身。先輩・後輩・同学年問わず多くの女生徒を跪かせ、視線を向けるだけで相手の頬を染めさせ可愛がる様についたあだ名が女帝。もっとも多感で排他的・危険な中学時代は、苛められる前に多くの女生徒どころか女教師までも味方に取り込み逆に付け込もうとした男子を言論で封殺。クラスを掌握後学年、学校全体まで手を広げる・・・まだ続けるかの？」

「ちょっと誤解を招く言い方じゃない？確かにちょっとハーレムっぽいことはしてたけど、本当の本気で関係を結んだ子はごく一部よ？全員等しく最大限に愛したしね」

「まあ確かにの。その辺で歪んでおれば、いくら格を持っているか

らと言って神になどせんよ。現にお主と関係を持っていた者も順調に幸せになっておるしの。お主と関係を持っていた者の中で、初めて男と結婚する者が出た時は内心かなり複雑だったようじゃがな」

「それはそれ、これはこれ、よ」

「ふむ、まあよい。なんだか色々話も逸れたし、途中受ける前提で進めてしまったがどうじゃ？この話、受けてくれるかの？」

そう言いまっすぐ視線を向ける目の前の一見お爺さんは、しかしその実素人の私でもわかるオーラを身に纏っている。

だからこそ、先ほどの色ボケ会話と思考を切り離し冷静に考える。

「最後に2つ質問。元の世界と私の関係がどうなるか。それと何故名前の記憶を封じたか」

「元の世界のお主の存在は抹消される。元から居なかったことになる。お主と関係があった人間については、現状に一番合った状況に世界が勝手に修正する。男の恋人がいたり、独り身ならそういった関係が元から無かったことになり、同姓のパートナーがいるなら条件にマッチしたお主の代わりとなる存在と関係を持っていた、などじゃな。名前はその存在をもっともよく表す。お主が名前を覚えているとこの世界に留めるのが難しくなるのじゃ」

打てば響くように返ってくる答え。

正直この時点で現実世界への未練は殆どない。

孤児院育ちのため肉親その他が居ない。

お世話になった孤児院ともしばらく連絡を取っていない。

同じく学生時代関係を持っていた子たちとも卒業を共に疎遠になっている。

社会人半年で分かった風な口を聞くなと怒られるかもしれないが、この先数年、数十年、仕事を覚えてしまえば単調な、平凡な一市民としての生活が待っている。

さっきの色ボケ会話も大部分魅かれるものがあるが、それを抜きにしても好んで読んでいた二次創作ものの展開。

そういえば……

「こういつた展開なら、神様からなにかしらの能力がもらえたりするのかしら？」

「もちろんじゃ。世界の管理者となるからには何であれ力を持たねばならぬからな。ついでに言つとよくある制限などもない。お主の望む能力を望むだけ与えよう。加えて不老不死はデフォルトじゃ。」

気前の良いことだと感心する。

そこで一旦心を落ち着けて、もう一度話を精査する。

そうして心を決めると、意識を神に向けはつきりと宣言する。

「その話、受けるわ」

「ふむ・・・まずはありがとう、と言っておこうかの」

「気にしないで。私にとっても刺激的な生活という意味で利のある話よ」

「それではさっそく与える力について話し合おうかの。まずは姿と名前じゃな」

姿と名前・・・不老不死、言うなればこれから永遠に等しき付き合いになる・・・慎重に選ばないと。

と言っても候補はすでにある・・・最初の姿がこの光球の時点で姿を変えるのは予想出来ていたし。

と思っっていたら・・・

「まあある程度神として力を付ければ、姿を変えることも出来るんじゃないかな。それでも世界に入り物語を完結させるなら早くて数年、下手すれば数百年もありうるのではな」

あっさり変えられる宣言。さすが神。そう言えば・・・

「まだ、どんな世界に送られるか聞いてなかったわね」

「ん？ああ、そうじゃったな。最初に行ってもらったのは『魔法先生ネギま』……のような世界じゃ」

……？のような世界？

「ずいぶん曖昧な表現ね」

「うむ、いくつかの要因が混ざり合った結果、原作にある事が無かったり、逆に無い事があったりするようじゃな。お主、原作知識は持つとるか？」

「いいえ、アニメと二次創作関連で調べた知識だけね。原作自体は読んだこと無いわ」

「ふむ、能力として授けることも出来るが？」

「……いいえ、いらないわ。別段そこまで知りたいとも思わないし。知らないなら知らないで楽しめるしね」

「そうか……して、どうする？」

「決めたわ。小説『レイン』シリーズのシルヴィア・ローゼンバークの容姿にして頂戴。ただし、原作は15〜6歳風の美少女だったから、私の年齢22歳相当の美女に、具体的には身長やスリーサイズを引き上げて頂戴。名前はそのままシルヴィアで。」

「お主……本当に欲望に忠実じゃな」

「当たり前じゃない、貰えるものは貰う主義だのも。本当は某4丁拳銃で天使狩りする魔女や、帝国の蒼き魔女、1000年生きた大召喚士様なんかと迷ったのだけれどね。」

「まあ、お主の性癖には4人ともぴったりじゃがな」

迷った3人だと、全身ラバー・軍服・ほぼ下着姿が一番マッチするのが最大の障害ね。軍服はまだ違和感少ないけれど。普段着から苦労する。

それにこの3人だと可愛い服装が難しいという難点があるし。

何よりネギまの世界に魔法使いならキャラ的にぴったりでしょ。

生き様も素敵で憧れるしね。

個人的意見から言えば是非レインとくっついて欲しいと思う。

「その年でまだ可愛いを・・・あだっ」

神様・・・年齢は関係ないのよ。

女の理想はいつでも可愛く美しく！

不適切な発言の神様にはチョコアタックをお見舞いよ。

「いたた、まったく・・・ほれ」

神様が手をかざすと、一瞬光で視界が塞がる。

視力が戻ると目の前には大きな鏡があり、そこにはバスローブに身を包んだ100人いれば100人が同姓・異性問わず美人と答えるだろう人が映っていた。

バスローブを脱ぎ、近づいてよく観察する。

豊かな銀髪はまっすぐに下され、腰まで届き艶やかに光る。

身長は女性にしては大きい方かな。おおよそ170cmくらい。

大きな瞳はサファイアブルー。ここは原作と違うが、大人びた風貌によくマッチしている。

顔の造形は原作通り、神が作った彫刻のように整っている。

全体的に見ても、原作のシルヴィアを成長させればこうなるだろうことは容易に想像できる完成度だ。

次に視点を下げて首や胸元、手や腕に向ける。

キメの細やかな、健康的な白い肌。

肌触りがシルクのような・・・というのはこういう肌を言うのだと実感。

ぺたぺたと肌を撫でながら、両手は大きく膨らむ女性の象徴へ。

「・・・んっ」

現実世界・・・もう神になる事を選択した私にとって前世よりも大きな胸を、自分の胸でありながら少々羨ましげに揉む。

感度の良さに危くスイッチが入ってしまいそうになるがここは自重。推定Eカップの胸は私的理想のと真ん中。

大きいんだけど大きすぎず、指が沈む。柔らかいのに張りがある。

女の身でありながら常々疑問に思っていた矛盾。正しく人体の神秘。肌の細かさと相まって、触る分にもとても気持ちいい。

特に自分にこう言った女体特有の柔らかさを持たない男性が胸を重視するのも分かる気がする。

そのまま視線を下に向ける。

きゅっと引き締まったウエストにほどよく突き出したヒップ。

引き締まった太ももから続く長い脚線美は、高い腰の位置も相まって鏡の前で回り後ろから眺めても綺麗な一言。

全身のチェックを終えバスローブを着こむと、音に気付き、脱いだ辺りから後ろを向いていた神様が振り返る。

「どっじゃった？」

「最高の出来よ。さすが神様」

「それは重畳。それにしてもお主、羞恥心は無いのか？」

「神様ならその手の欲は少ないのでしょ？それにこれだけ綺麗だと気にならない・・・というか見せびらかしたいという思いが出てくるわね。ナルシストの人ってこういう気分なのかしら」

「一応男の目にさらしても気にならないのか？」

「あれ、言ってなかったっけ？私は確かにレズビアンだけでも、別に男嫌いってわけじゃないもの。興味が無いだけで。だから別に見られても気にしないわ。まあ、この先も男を好きになる事はないでしょうけど。だから自称・真性なのよ。」

「なるほどの。まあ、満足してもらえたならよいが。次はどうするか」

肉体を得た私は神様に向かうようにイスに腰掛け、目の前に現れた紅茶を飲んで思考を回転させる。

「そうね・・・まずは手堅くステータスマAXで行きましょう。肉体的・精神的全能力を上げて頂戴」

「本当に容赦ないの・・・」

「私の好きな言葉・・・粉碎！玉碎！大喝采！だから」

「・・・もう何も言わん・・・ほれ」

神様がまた手をかざし体が光る。しかし今度は目に見えて変化が無い。

しかし立ち上がり体を動かすと変化は一目瞭然。

軽く走ってみたり、飛んでみる。手近なものでイスを掴み振り回してみる。まるで小枝のように振り回す事が出来る。

頭の回転も早くなった気がする。体を動かすのと同時に状況判断なども多角的に行える。

「すごいわね・・・具体的なスペックはどうなのかしら？」

「そうさの・・・肉体的には大抵の世界で最強種に認定されている龍族の中でも、更に強い古龍種を片手で屠れるのう。神候補の不老不死に加えて超再生、首を落とされても心臓を貫かれても次の瞬間には再生するぞ。まあ、そもそも体を上手く使えるようになれば、硬化で攻撃が通らなくなるがな。精神的、頭脳的に言えば、MITの首席が赤ん坊に思えるくらいの能力かの」

「・・・へえ、さすが神様」

龍族を片手つて・・・それにMIT、マサチューセッツ工科大学の首席つて言ったら、おおよそ世界でもっとも頭が良い人つてことにならなない？厳密には違う場合もあるのかもしれないけれど、それでも世界で十指には入るわよね・・・。IQ換算？250くらいだつて

まあ、貰えるものは貰う。うん、次ね。

ネギまの世界なら、気と魔力ね。

「気と魔力の総量、それを完全に扱う事の出来る才能、あらゆる技

術を短期間で効率よく習得できる才能を頂戴。後は前世の世界の一般知識を一通り。」

「ふむ・・・ほれ。総量はエネルギー換算で地球5つ分。才能と一般知識だけでいいのか？このままじゃと、技術が無いから、下地がすごいだけの一般人じゃぞ？」

「序盤はチート能力ごり押しで生き残り、その間に自分で身につけるわ。こればかりは自分で学ばないと本当の意味で使いこなせないし。何よりーから学ぶのも楽しそうだしね。」

「ほう・・・他にはないのか」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの不老不死を何とかする方法」

「・・・・・・残念ながらそれは無理じゃ」

制限無しと言っておきながら無理・・・という事は

「それが一部の例外ということかしら」

「そうじゃ、原作がある世界では、開始時点で登場人物が絶対に揃わない状況に陥ると世界が崩壊する」

「それじゃあ、たまにあるアリカを寝とって薬味が生まれえない状況を作ると？」

「またコアな設定じゃな、しかも女の身で寝とるって・・・まあ崩壊するな」

重要なのは、登場人物が揃う事。それなら状態は関係ない？

「彼女の不老を一時的にでも抑える方法は？」

「それならあるが・・・」

「じゃあそれを頂戴。女にとって、いつまでも成長しないってのはきついもの。お洒落も出来ないし」

「よかるう。方法は向こうに行つてすぐ、魔法を学んだときに入手できるよう手配する。」

「それじゃあ、最後に一つ」

言葉を区切ると一旦目を閉じ深呼吸。

最後の迷いを捨てると、正面の神様を見つめはっきり告げる。

「殺しの覚悟を得る手段」

「ほう・・・」

「神様ならちよつとの時間が1000年位になる部屋とかあるでしょう？猫の姿をした神様の部屋のな。貸して頂戴」

「あるにはあるが・・・急じゃのう」

「どうせこれから色々な世界に行くのなら遅かれ早かれ殺しは経験するでしょう。さっきので分かっていると思うけど、私は1400

年ごろの地点から介入するから」

「ハイ・デイルイトウォーカー吸血鬼の真祖と共に、か」

「ええ、だから殺しも出来るようになっておく必要があるの。技術はともかく・・・心が折れないように」

「・・・よろう。その扉から進むといい」

そうして神様が手をかざすとどこからともなく扉が現れる。

そして私の服装も、全身をぴったりと包むウエットスーツの様な格好に。

手には両刃の長剣。

「ありがとうございます。とりあえず1000年位籠ってみるわ」

「ああ・・・」

言葉少なな神様を安心させるように微笑むと、扉を開ける。

そうして私は新たな、刺激的な生活に繋がる一步を踏み出した。

第2話 神様特製装備ーやりすぎ？なにそれおいしいの？（前書き）

前回のあらすじ

神様と会話

並行世界の管理者となることに

チートをたくさんもらう

第2話 神様特製装備！やりすぎ？なにそれおいしいの？

皆さまごきげんよう。

小市民A改めシルヴィアよ。

神様に拉致され、なんやかんやで神（魔王）候補になってチートバグキャラになったどこにでもいる女よ。

今は神様特製、精神 時の部屋で100年耐久殺し殺されまショーを終えて出てきたところ。

最初の部屋に戻ると神様はいなくて、机の上には紅茶。

私的には日本茶の方が好きなのだけれどこれからの事を考えると紅茶も飲めなきゃいけなししね。神様製らしく飲みやすくしておいしいし。

とりあえずイスに腰掛け、一息つく。

神様は案外鬼畜だった。

魔界に送られるような犯罪者の魂を呼び寄せて人の形に戻した。

私はそれを・・・斬った。

体感時間でおよそ100年、それでも決して忘れず、殺しに慣れることは無かった自分の人間性にすこし安心。

それでももう、殺すことに躊躇はしない。後悔もしない。

私は私のために殺した存在を受け入れ、背負い、歩んでいく。

その覚悟を持つことが出来た。

部屋に籠った最初のころは酷かった。

当然と言えば当然、神候補になろうと、元はただの人間。

特に人を斬ると言う非日常の行動。それを成すには強い動機が必要だ。

それが無いまま、深く考えないまま必要だからと部屋に入ってしまった。

1人殺し、うろたえて嘔吐している間に他の魂に殺される。

痛みに苦しみ、逃れるために反撃。

そんな狂乱の中、散り散りになった思考で考えていた。

刺激的な生活を欲して話を受けた。ではその生活の中で私はなにがしたいのか？

殺し殺され、出した答え。

それはとても人間的だと思えるもの。傲慢・・・とも言えるかしら。

『私は、私と私の大切な者のために生きる。そのために力を行使する』

当然と言えば当然の、結局はそんなものだった。

神であれ魔王であれ、管理者として世界を渡り、物語に介入し見届ける。

そんな私の行動指針は私の好きなように生きると言う事。

気に入った者と楽しく過ごし、邪魔する者は叩き潰す。

手の届く範囲の大切な者を守り、それに仇成す者を捻り潰す。

気に入らない者は放置する。協力も助けもしない。生きようが死のうが私には関係ない。

私は正義の味方ではないし、無関係な人のために行動なんかしない。

1人の大切な存在と、1000人の無関係な存在。どちらかしか助けられないなら、私は迷わず1人の大切な存在を助ける。

力のある者は多くのものを助けなければならない？そんなのはごめんよ。

その存在を気に入るかどうかは私基準。

人であれ、物であれ、あるいは概念的な存在、組織や社会・国などもあるかもしれない。

何であれ、気にいったのなら最大限力を使い助け守り協力し、気にいらなければあっさり斬り捨てる。

私は私と、私が大切だと思う者のためにのみ力を使う。

力を持つ者の傲慢・・・排他的・・・いくらでも出てきそうね。

それでも構わない。それが私の生き方。私の覚悟。

やっぱり魔王寄りかなと苦笑しながら後ろの存在に声をかける。

「そんな感じで行こうかと思うのだけれど、どうかしら？」

「そんな感じで行くのかと思うのだけれど、どうかしら？」

「ふむ、まあよいのではないか？」

久しぶりに会った神様が目の前に座る。

「一応気配を断っておったのじゃが、良く気付いたの」

「それはもう、100年も鍛えればね」

そう、鍛えたのだ。

実際殺しの覚悟を固めて、体に染み込ませるのは最初の10年くらいで済んだと思う。

それじゃあ後の90年何をしていたかというところ、一言でいえば鍛錬。

一言でいえばチート鍛錬。

部屋の特長で体力は減らない・眠くならない・お腹も減らない。

そんな中で次々出てくる相手に戦い続けた。

最初は呼んだ魂の、つまりは普通の人々が相手だった。

それがいつしか魔物になり、さらには天使や魔族になっていた。

ちなみに魔物は、知性の低いモンスターを指す。

簡単に言えばゴブ　ンやス　ィムだ。

その上位者が魔族。高い知性を持つ存在。原作だとヘルマンとか言ったのがこれに当たる。

この2つを合わせて悪魔という。その上が魔王。

部屋の作った仮初の存在なので、自我や命といった意味では存在していない。

それでも魔族、それも夢魔の綺麗なお姉さんが出てきたときは神様を少し恨みつつ泣く泣く斬り伏せた。

そんなこんなで100年も戦えば、自然と技術も鍛えられる。

具体的には体の使い方や気の扱いなどだ。

お蔭で気を全身に巡らせて強化したり、気弾を放つことも出来るようになった。

我流で剣術もそれなりに。途中から日本刀に変え、文字通り『斬る』ことを重視した。

西洋の剣は力に任せて叩き斬る、が基本だったから。

「そつだ、忘れる前に言っとかなきゃ。1つ追加で欲しい能力が来たの」

「何じゃ、まだあったのか？」

「魔眼が欲しいのよ。能力は分析・解析特化型」

「何じゃ。直死の魔眼やら絶対遵守の王の力でも望むかと思つたのに」

「その辺は自分の手で直接するからこそ楽しいのよ？」

にっこり微笑んだというのに、神様は視線をそらした。あ、一応言つとくと従わせるって意味でよ？殺して喜ぶ変態さんにはなっていないから。可愛い子を跪かせるなら自らの力でじわりじわりと墮としていくのが・・・ね。

「ワシはなにも言わんぞ、ほれ」

「神様の対応が冷たいわね・・・ん、ありがとう」

神様が手をかざすと一瞬目のあたりが熱くなる。恐らく変化したのだろう。

「魔力を集中させれば発動じゃ。発動中は眼の色が深紅に染まるぞ」

「わかつたわ。・・・さて、そろそろ行こうかしら」

「そうか・・・持ち物や装備はどうする？」

神様の言葉にふと考える。

今は部屋に入るときと同じくウェットスーツに無銘の日本刀

「うーん、神様に任せるわ。どんなものが来るか楽しめるし。向こうで目覚めたら持っている状態にしてちょうだい」

「なんでもいいが1番困るんじゃないか。まあよいわ、任せておけほれ」

神様が手をかざすと机の横に大きな光球が現れる。

「それがお主の行く世界じゃ。触れれば入る事が出来る。時代は1400年ごろ、原作登場人物の1人、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルハイ・デイルイトウォーカーの住んでいた城の近く、状況は彼女が吸血鬼の真祖にされてから1週間というところじゃな」

神様の説明を聞き納得すると立ち上がる。

「それじゃあ、行ってくるわ」

「ああ、達者での」

短い会話を終わらせると、最後に神様に頷き、光球に触れる。

視界が光で満たされる。

さあ、それじゃあ私の新たな物語をはじめましょうか。

「・・・・・・・・・・」

目を覚ますと目の前には綺麗な小川が流れ、向こう側と自分の後ろには森が広がる。

そんな森の脇の草っぱらの上で目を覚ました。

気を巡らし周囲を確認。

付近に獣や人の気配はしない・・・とりあえず安心ね。

それじゃあさっそく装備の確認をしようかと立ち上がり、視線を自分に向ける。

まず履いているのは膝下ぐらいのロングブーツ。

きつ過ぎず緩すぎず、しつかりとした作りのオーダーメイドかと思えるぐらいのぴったりサイズ。

ヒールは無いぺたんとしたタイプ。まあ、これからしばらくは歩きが基本なのだからこれでいい。

上にブラウス、下にショートパンツは原作通り。違うのはベルトをしていたこと。

ただショートパンツが思ったより短くて、お尻が少し出るかどうかのホットパンツレベルなのはどうか。

まあ、分類上どちらもシヨートパンツなんだとか細かい話は置いていて。

それに実際の所、きわどい短さのホットパンツから延びる引き締めった脚は我ながらカッコいいと思う。

・・・やっぱりナルシストの気が、ゲフンゲフン

次に地面に置いてあるローブ。

まあローブといっても、袖あり、前開き、フード付き、腰丈の・・・むしろパーカー？と思わないでもない。

でもローブ。ローブと言ったらローブ。なぜなら魔法使いの正装はローブと決まってるから（ドーン）

最後にマント。これは膝下くらいまで覆う、完全に外套としてのマント。フード付き袖なし胸元でボタン止め。

そんなこんなで見た目の確認は終了。ちなみにローブ以外はみんな黒。

ローブは黒地に赤と金で飾りつけられている。

ローブも着こむと全体的に品の良い感じでかなり好印象。神様グッズヨブ。

・・・ただしちらりと覗いた下着は上下とも高級店にありそうなセクシーな赤だった。私の好み丸わかりですね、わかります。

マントはとりあえず脇に置いておく。

一通り眺めると、今度は意識を体に向けて集中。

お臍の下あたりにある、気の集積地・丹田。

ほぼ同じ位置にあるのを感じる魔力に意識を集中。気と同じ要領で魔力の通り道を通し全身に魔力を行きわたらせる。

最初の数分はまったく動かなかったが、次第に微量ながら流れだす。

今はこれでいいと、そのまま目にだけ集中する。

魔眼の発動を感じる。そのまま視界を動かすと、意識したものについての情報がどんどん表れる。

優秀なのは何でもかんでも情報が表れ氾濫する訳ではないと言う事。

あくまで意識したもの、あるいは意識の上で特定したものに限られるようだ。

そんな訳でもう一度身に付けているものを眺めてみる。

まずはブーツ。

オートリペア・オートクリーン・オートリジエネ
自動修復・自動清潔・自動体力回復・自動加速の魔法が付与。

・・・壊れず常に清潔、どんどん回復いくらでも歩けます（加速付き）ってことよね。

ホットパンツにブラウス、下着も見てみる。

オートリペア
オートクリーン
自動修復・自動清潔の魔法付与

・・・手荒に扱っても破れない、おまけに洗濯いらずで常に清潔
てことね。

ローブも見てみる。

オートプロテス
オートシエル
オートリジエネ
オートリフレッシュユ
自動物理防御・自動魔法防御・自動体力回復・自動魔力回復・自動
リペア
オートクリーン
オートフアイン
修復・自動清潔・自動環境快適魔法付与。

・・・これ1着で鉄壁防御！どんな環境でも生きて
いけます！快適性も保障！

・・・まあいいか。便利だし。

最後にマント。

オートプロテス
オートシエル
オートリジエネ
オートリフレッシュユ
自動物理防御・自動魔法防御・自動体力回復・自動魔力回復・自動
リペア
オートクリーン
オートフアイン
修復・自動清潔・自動環境快適魔法・自動収納魔法付与

これ、ローブと一緒にじゃない？と思ったのだけれど全然違う。

外側＝マントの防壁を越えた先にはローブの防壁が展開・・・とい
う事よね。

オートホールド
自動収納魔法は、マントの内側に押し当てると勝手に収納されるよ
うだ。マントの裏地がゲートになっている。倉庫みたい。

そんな訳でちよつとやりすぎた？いやいや便利は偉いと内心ホクホクしながら次に視線を向ける。

次は草っぱらに寝転んでいた私の右におかれていた武器2つ。

1つは杖。

全長は150cmくらい。立った私の目線の高さに先端が届くくらいだ。

片手で握れるくらいの太さで先端から20cmくらいが少し太くなり六角形になっている。

その六角形が台座となり、その上に6つの爪で固定された拳サイズの水晶が付いている。

台座部分には2匹の蛇が逆方向に絡まり、螺旋を描いて上って行き、台座の両横に頭を付ける意匠が施してある。

・・・この後の展開がなんとなく読めそうだと思いつつ魔眼で解析。

名称『ヘルメスの杖』能力：自動魔力回復付与・魔力伝達効率強化・オートリフレッシュ魔力集束効率強化・魔力拡散効率強化・状態不変

うん・・・あれだね。ケリュケイオンとか呼ばれることもある、ギリシア神話の伝令の神、ヘルメスが持つ杖ですね。わかります。

というか、ゼウスがいるならヘルメスもいるんじゃないの？怒られないの？とか心配になる。

それにこの杖、2匹の蛇が絡まり上る様が、光と闇・善と悪・天と地・太陽と月・男と女・陰と陽なんかの二面性を表すとかじゃなかったっけ？

女の身で女を愛する私としては持ち主として杖に喧嘩売ってない？いや、二面性の統合という意味ではむしろ合ってるのかしら？

……これ以上はやめておきましょう。能力的に便利で強そうなのは事実だし。

それにしてもスタートから伝説級武器装備か。さすが神様。さすが私。

更に解析すると、魔力を流して念じると30cmサイズの短杖に変化することも出来るようで、変化させて右の腰のベルトに差す。

もう1つの武器は、特徴的な反りをもつ短刀。

刀身も30cmほどで鰐がない。ナイフ代わりに使えそう……
・そんなことを考えていた時期が私にもありました。

名称『妖刀正宗』能力：自動体力回復付与・切れ味強化・状態不変

オートリジエネ

……日本刀の弱点に真つ向から喧嘩売っているわね。折れず・曲がらず・欠けずの状態不変に加えて切れ味強化のフルコンボ。

おまけにこれも杖と同じく魔力を流すと形状が変化したわ。

刀身60cmほどの日本刀タイプと、刀身90cmほどの大太刀タイプに。

・・・大太刀をみて、某片翼の天使を思い出した私は悪くない。

あのキャラクターは好きだもの。左肩からまっすぐ切っ先を向けて構えればいいのかしら？

まあ便利だからいいけど、と切り替え短刀に戻して此方は左腰のベルトに差す。

杖も短刀も色は黒・・・変化が無いとか言わないように。

まあ、黒は好きだし構わない。

最後に寝転んでいた地面の左側に残ったリュックも黒よ。

かなり小さいタイプ、何が入っているのか開けてみる。

・・・うん、だってこの物語チートだもの。

そう思いつつ中を見聞。

入っていたのは松明にランプ、金物の鍋や食器、水筒にタオルや火打石、釣竿など旅の必需品がごろごろ。

水筒は竹製の小さめのモノが6本。あんまり入らないかと思ったら魔法で中身無限になっていた。味は普通の水とレモン風味にオレンジジュース。

何故6本とか思ったけれどこの後の展開を考えてですね、わかりません。ご都合主義万歳、グツジョブ神様。

小分けにされたいくつかの袋。1つには今私が入っている服装が3セット入っていた。一応予備？たぶん使う機会無いよと思った私は悪くない。

もう1つの袋には下着がたくさん。もう1つは食糧が少々、もう1つは空だった。

最後に手のひらサイズのお財布。中には数枚の金貨。この時代ならかなりの値打ちかな。

とりあえず財布をローブのポケットに入れておく。

リュックに小分けの袋、財布の容量キャパシティは無限になっていた。

もうなんでもありです、はい。

リュックの中身の最後は、1冊の大きな本。

中身を覗くと驚きの内容。

流し読みしただけでも、この世界に存在するあらゆる魔法についての記述がしてある魔導書だった。

これを読んで学べば魔法関連の技術は問題無さそう。

確かに、エヴァンジェリンと2人で旅することが出来るようになってたとしても、独学じゃ難しいところもあるしね。

確か原作だと10年かけて闇の魔法を開発したりしたんだっけ。

ぱらぱらめくると、神様に頼んでおいた彼女の不老を一時的に解除する方法も発見。

書かれた内容に従って描いた魔法陣と、チートの膨大な魔力でゴリ押しすれば何とかなるそう。

そうしてぱらぱら眺めていると、気で強化した耳に、少女の悲鳴とそれに続く怒声が聞こえてくる。

ゆっくり見るのは後回しと魔導書をリュックに片付ける。

リュックをマントの倉庫に仕舞うと、そのまま羽織り一気に声のした方へ駆けだす。

さあ……この世界の物語の、メインヒロインを救いに行きましょうか。

主人公設定

名前

シルヴィア・マクダウエル（前世の名前は封印 消去されたため容姿のキャラクターからそのまま名乗らせてもらう。第4話でエヴァンジェリンと義姉妹になったので、以降マクダウエル性を名乗る）

職業

OL 神（魔王）候補

年齢

22歳（生前・転生後の肉体年齢＝永続）
122歳（精神と の部屋で修業後の精神年齢。以後加算）

容姿

小説『レイン』シリーズのシルヴィア・ローゼンバーグを原作15歳～6歳の美少女から22歳の美女に引き上げた容姿。
身長は170cmほど。スリーサイズはボンキュッボンのグラマラス美人さん。Ecupのボイン級。
サファイアブルーの瞳。彫刻のような造形。高い腰にすらりと伸びた脚、肌も白くきめ細やかなすべシルクの完璧美女仕様。

貰った能力

不老不死：首を落とされても心臓を撃ち抜かれても死なない。

超再生：負傷した次の瞬間には傷が癒える。

ステータスMAX：肉体的には古龍を片手で屠る事が出来る。精神的・頭脳的にはMIT（マサチューセッツ工科大学）の首席の学力が赤ん坊に思えるくらい。IQに換算すると250くらい。

気と魔力の総量増加：総量がエネルギー換算地球5つ分。

あらゆる技術を短期間で効率よく習得する才能：常人の10倍から上の習得効率

前世の世界の一般常識

魔眼：分析・解析特化型。情報の取捨選択、特定情報のロック機能など多機能・汎用性高。魔力を込めると発動。発動中は両目が深紅に染まる。

保有スキル

気：臍の下、集積地である丹田から全身に気を流し、身体強化が行える。単純な筋力強化から反応速度や体感時間の向上など効果は幅広い。手や足に集中させた気弾を放って攻撃することが出来る。『高速移動術・瞬動』が使える（第3話）

魔力：臍の下にある丹田（気と別物だが、場所が同じなので同名に

した)から全身に魔力を流すことで、身体強化が出来る。強化の効果は気と同じ。詠唱その他、精霊に魔力を渡すことで、魔法を行使することが出来る。(第5話・第6話)

魔法について

世界に存在するマナ(生きとし生けるものが持つ)を魔力に変換、精霊に渡すことで魔法を具現、行使する
魔力障壁：魔力を使って作る魔法使いの基本防御手段。一度作ると自らの意志で壊すか他者に壊されるまで自動で展開。作る際に魔力を消費。

基本体系

詠唱魔法：呪文を詠唱することで発動。もつとも基本。
術式魔法：魔力を込めた魔法陣を形成。その中で鍵とする行動(陣の中に入る、陣の中で魔法を使う等)で発動。罠の様な魔法。
術式詠唱魔法：上記2つを合わせた魔法。鍵となる行動が詠唱になる。
基本的に上から下に下がるにつれて威力が上がる。ただし魔法使い本人の技量〓制御力に左右される。
無詠唱魔法：詠唱を破棄して発動する魔法。基本的に詠唱を行うよりも威力は落ちる。これも魔法使いの技量に左右。

属性

火・氷・風・土・雷・水の6属性(左から右に強い関係を持つ、水は戻って火に強い)

闇と光の2属性（反発）

FF魔法

シルヴィアのみが使用できる魔法。

貰った服装

ローブ

黒地に赤と金で飾りつけ。袖あり・前開き・フード付き・腰丈の、

パーカーの様なローブ。

オートプロテス

オートシエル

オートリジエネ

オートリフレッシュユ

オート

自動物理防御・自動魔法防御・自動体力回復・自動魔力回復・自動修復・自動清潔・自動環境快適魔法付与。

ブラウス・ホットパンツ

どちらも黒。ホットパンツはぎりぎりお尻が出ない長さ。

オートリベア

オートクリン

自動修復・自動清潔付与。下着類にも同じ魔法を付与。

ロングブーツ

膝下ぐらいの長さの黒ブーツ。ヒールはないぺたんとしたタイプ。

オートリベア

オートクリン

オートリジエネ

オートヘイスト

自動修復・自動清潔・自動体力回復・自動加速付与。

マント

膝下丈のフード付き袖なし、胸元でボタンで止める完全外套使用。

色は黒。

オートプロテス

オートシエル

オートリジエネ

オートリフレッシュユ

オート

自動物理防御・自動魔法防御・自動体力回復・自動魔力回復・自動修復・自動清潔・自動環境快適魔法・自動収納魔法付与

貰った装備

ヘルメスの杖

全長150cm。片手で握る事ができる太さ。先端から20cmほどが太く六角形の台座を形作る。その台座の上に6つの爪で固定された拳サイズの水晶が付いている。台座には2匹の蛇が絡まり螺旋を描いて上り、台座の淵に頭を付ける意匠が施してある。魔力を込めると30cmほどの短杖に変化する。

オートリフレッシュ
自動魔力回復付与・魔力伝達効率強化・魔力集束効率強化・魔力拡散効率強化・状態不変付与

妖刀正宗

刀身30cmほどの短刀。鍔なし。魔力を込めると刀身60cmの日本刀、90cmの大太刀に変化する。

オートリジエネ
自動体力回復付与・切れ味強化・状態不変

貰った持ち物

リュック

片方の肩にかければ済むくらいの小さな黒いリュック。実は神様の力で容量が無限にされている。中の袋類も同じく容量無限。

中身

松明・ランプ・金物の鍋や食器・水筒・タオル・火打石・釣竿など
旅の必需品がごろごろ。小分けにした袋。財布

水筒

竹製の小さめのものが六本。味は水・レモン風味・オレンジジュース。これも神様製の中身無限。

小分け袋その1

シルヴィアの着る服装が3セット。予備。

小分け袋その2

色とりどり、可愛いからセクシーまで幅広い多数の下着。

小分け袋その3

食糧袋。食糧が少々入っている。

小分け袋その4

今のところ空。

財布

手のひらサイズの革袋製。中には数枚の金貨。

魔導書

シルヴィアの介入した『魔法先生ネギま』をベースにした世界に存在する全ての魔法を記述した魔導書。
その他幅広い情報も記載（第5話）

事情

突然変異により魂が神・魔王クラスの格を得た一般人・女性。

増加する人間界に神・魔王Ⅱ管理者の手が回らなくなりつつある状況を受け、神様より勧誘を受ける。

刺激的な生活を求め、神（魔王）候補として並行世界である人間界へ介入する管理者として歩み始める。

最初の世界は『魔法先生ネギま』ベースの世界。

性格・内面

生前から覚悟を持ち貫く誇り高い人物が好き。自分もそう在りたいと常々考え実行する。

どんな事情であれ、行動と選択には相応の責任が発生する、が信条。もともと一般人だが、今後を考え入った神様の持つ部屋で殺しを含め、これからの自分に対する覚悟を決める。

『私は、私と私の大切な者のために生きる。そのために力を行使す

る』

自分や自分が気にいった・大切な存在のためには全力を尽くす事を厭わない優しさと、逆に気に入らない・どうでもいい存在に対しては無関心で関与しない、目の前で生きようが死のうが構わないと斬り捨てる冷酷さを併せ持つ。

自分や自分の大切な存在を邪魔する者・仇成す者は全力で叩き潰す冷徹・苛烈さも持つ。

自分は正義の味方などではなく、無関係な全ての人のために動くなどないと割り切っている。

1人の大切な存在と、1000人の無関係な存在。どちらかしか助けられないなら迷わず1人の大切な存在を救う。

究極的に、自分と自分の大切な者が幸せであればよく、その他は端的に言ってもいいという考え。また、それらを助けなければならぬ理由は無いと考えている。

ここで言う大切な者とは、広義的に人・物・概念的な存在「組織や社会、国など幅広く指す。

こういつた考え・行動が可能なのは、力を持つ者故の権利であり、同時に傲慢・排他的であるとも理解している。

理解した上で受け入れ、貫く覚悟を決めている。

管理者としての道を選択した責任は、物語を見届けることで果たす。自分と自分の大切な者のために生き、力を使う。その覚悟を貫く途

上で邪魔する者を排除したり、殺したりしたとしても、躊躇も後悔もせず、ただその事実・存在を受け入れ、背負い、歩む覚悟を決めている。

某皇子の言葉「撃つていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだ」が好き。自分を撃つ側に置き、撃たれる側の事情には頓着しない。撃たれる側が強かろうと弱かろうと、正しかろうと悪かろうと関係なく撃つ。全ては自分と自分の大切な者が生きるために。いずれ自分が撃たれる事態に陥るかもしれないとしても。その覚悟を表す言葉として、このセリフが好き。

基本的に公私のON/OFFが出来る人。

仕事はクールにスマートに。遊ぶ時・ハメをはずすときは思い切り外す。

またそういう人に好感も抱く。

女だらけの孤児院育ちで、女子高・女子大出身。レズビアン・サディストの性癖持ち。

また、その情報を隠す事もせずオープンにしている。

学生時代、多くの女生徒・女教師を虜にして跪かせ可愛がる様から付いたあだ名は女帝。

中学時代は引きこんだ人間で固め男子を封殺。勢いで学校全体を掌握したこともある。

特に深い関係を結んだのはごく一部。その全員を分け隔てなく愛し、相手に認めさせるだけの愛を持つ。ハーレム主人公補正付き。

男嫌いという訳ではなく、会話も普通にできる。ただし興味が沸かず恋愛感情も発生しない。

生前はゲームなどもそれなりにした。プレイスタイルは限界まで育て上げて蹂躞する無双タイプ。性癖：サディストも関与。

圧勝という言葉が好き。合言葉は『粉碎！玉碎！大喝采！』

性癖：レズビアンの影響により可愛いものに目がない。この場合の可愛いは、見た目はもとより内面が重視される。

誇りや信念、確固たる自分というものを持っている人、思慮深い人などが好き。

逆に浅慮な人、勢い任せな人、与えられたもののみで思考しない人などは嫌い。

そんなシルヴィア基準をクリアした存在（人・物）全般を『可愛い』と評価する。合言葉は『可愛いは最強！』

「皆さまごきげんよう。作者のクロです。ご挨拶が遅れたことをお詫びするとともに本作読んでいただきありがとうございます。」

「主人公のシルヴィアよ。私からも感謝するわ」

「今回は第1話・第2話で出てきた主人公・シルヴィアの設定をまとめさせていただきました。今後も更新すると思います」

「ねえクロ。太丈夫なの、これ。色々インフレしてない？」

「大丈夫です。この作品の合言葉は『粉碎！玉砕！大喝采！』ですから」

「つまり私が無双すると？」

「そうですね。ちなみにもう一つの合言葉は『可愛いは最強！』です」

「そこは正義じゃないの？」

「正義は一義的ではないのです。ちなみに至高も考えましたが、クロのリスペクトする某作者様と被ってしまうので最強にしました。」

「どちらにしてもその合言葉だと・・・色々食べちゃいそうね」

「その予定です。どれだけ無理矢理感をなく自然に墮とせるか・・・それが課題です」

「前提からしてハードル高いわよね。というか中学生を墮とすって・・・まあ魅力的な子が多いのは否定しないけど」

「具体的にはメインヒロインとその従者に加え、日本人形系お嬢様・護衛・西洋系お嬢様・和風お嬢様・スナイパー・同人メガネっ子・ヴァーチャルメガネっ子・養護教諭、以上が現在の目標です」

「隠す意味あるの？というか多いわね」

「一応念のためです。まあしばらくは登場しません」

「しばらくは原作前の話ね」

「プロット確かめるとかなり長くなる予想ですが、気長に楽しんでいただけると嬉しいです」

「天上天下唯我独尊突っ走っているわよね。読み手を選びそうね」

「まあ、それも含めて『私は、私と私の大切な者のために生きる』ですのぞ」

「次回はその大切な者、メインヒロインの登場ね」

「いかに颯爽と、カッコよく助けるか。そしてその後口説き墮とす

か。それが問題です」

「せいぜい悩んで私を活躍させなさい。それじゃあ今日はこの辺でお別れね」

「作者より偉いとはこれいかに」

「なにか？」

「いえいえ」

「それではまた次回お会いしましょう。皆さま、ごきげんよう」

主人公設定（後書き）

よければ感想、お待ちしております。

第3話 遭遇と怒りと首チヨンパ（前書き）

前回のあらすじ

覚悟を決めた。

世界に介入開始。管理者人生スタート。

神様から貰った物を点検。

第3話 遭遇と怒りと首チョンパ

羽織ったマントを靡かせながら少女の悲鳴が聞こえた方へ向かって森の中を駆けていく。

元々のチートボディに加えて、全身に気を巡らせ強化した私が走れば、常人では到底到達できないスピードを出す事が出来る。

ほどなく、目的地に到着。

そこに彼女は居た。

原作の登場人物の1人、私の会いたかった相手。

金髪の西洋人形のような美しさを持つ彼女の名は、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。

呪いによって吸血鬼の真祖^{ハイ・デイルイトウォーカー}、日の光や流水など一般的な吸血鬼の弱点を克服した上位種、人ならざる存在にされてしまった少女。

私の到着はまだ誰にも気づかれてはいない。

崖を背に震える少女と、それを囲む大人の男達。

数は全部で10人。

私はその大人達の後ろに着いた形だ。

少女は少しずつ下がっていたようだがそれも限界。もう少し踏み出

せば崖下の川に真つ逆さまの状況。

「ようやく追い詰めたぞ、邪悪な吸血鬼め！」

人垣の中心、いかにもなローブを羽織った男が杖を少女に向け叫ぶ。

見るからに聖職者。問題は『どちら側』の人間かという事。

普通の人間たちが暮らす『あちら側』、たしか『旧世界』と言った
かしら。その聖職者でも、この時代なら杖を持っていておかしく
ない。

魔女狩り・異端狩りも最盛期はもう少し後としても、全くない訳じ
やない。

まあ、この場に限って言えば『あちら側』であろうと、『こちら側』
つまり魔法が認識されている『魔法世界』の側であろうと関係ない。

しかし今後の事を考えるなら話は少し変わってくる。

追手云々の話しになるからだ。

回りの他の大人は明らかに付近の村人という様子。ローブ男の言葉
に乗せられて来たのだろう。

視線や表情、纏う気はまさに“狂気”

予想通りだとしたら・・・恐らくその通りなのだろうが・・・
なんとも虫唾が走る。

「あなた達、いい大人が寄って集って1人の少女に、何をしているのかしら？」

声を掛けながら森から出て近寄る。

その時、私は自分の胸が締め付けられるような痛みを感じた。

こちらに背を向けていた大人達より一足先に彼女は私の存在に気付いた。

新たな声が聞こえたことよって助けを期待したのだろう。

その表情を一瞬、安堵に彩られる。

しかし次の瞬間、出てきたのが私だと、否、“大人”だと気付いた彼女の表情は、落胆・諦観のそれに変わる。

神様の話では、時間軸としては彼女が吸血鬼の真祖ハイ・テイライトウォーカーになって1週間というところ。

その間、逃げ続け、心をすり減らして来たのだろう。

いつの間にか、私は拳を握りしめていた。

胸に渦巻くのは明確な怒り。

彼女を人ならざる存在に変え、大切なものを奪った元凶に。

教え植えつけられた知識と感情だけで彼女を人ならざる者と罵り、恐れ、害そうとする目の前の男達、否、下衆達に。

そして何より、力を得ながら目の前の彼女すら救えていない私自身に。

不老不死の呪いはもとより、この1週間の苦しみと言う意味で。

私が彼女を救いたいと思っていたのは神様も知っているだろう。

それでお1週間後という時期だったのは、それが介入の限界だったからだと言想できる。

つまりは、今の時点の私ではどうにもできないことと言える。

そもそも全人類を助けられる訳では無いし、助けようとも思わない。

候補とはいえ神にも出来ることと出来ないことがある。

それでも目の前の少女を一時でも苦しめ、救う事が出来なかったのが腹立たしい。

たとえ原作知識と言う色眼鏡の部分があったとしてもだ。

「なんだ貴様は！我々の邪魔をするのか！」

そんなことを考えていると、目の前のローブを着た下衆が返事を返してきた。

最初はマント、外套を羽織る私を唯の旅人とも思っただろう。

しかし黒と言う色にいぶかしみ、若干の警戒をしながら声をかけてくる。

「言ったでしょ、あなた達が彼女になにをしているかを聞いているの」

「この娘はこう見えて吸血鬼なのだ。それも上位種の真祖だ！故に我々が討伐する！」

「なぜ？」

「吸血鬼は悪だ！悪は滅ぼさなければならぬ！だから正義たる我々が討伐するのだ！」

想像通りの、なんともお粗末な話だ。

しかしそのお粗末な話しを並べる下衆も、周りの下衆達も、皆正義と言う言葉に酔い、当然とばかりの表情。

・・・まだよ、シルヴィア。まだ抑えなさい。まだ引き出せる情報があるはず。

そう思いつつ、元々嫌いだった正義という言葉がより嫌いになるのを感じながら話を続ける。

「その子が吸血鬼？冗談でしょう？なにかそうだと言う証拠でもあるの？」

「……………」

その私の質問に、饒舌だった下衆の言葉が止まる。

とっさの反論がない、という事は1つの可能性が浮かび上がる。

この男の根拠としている事象が『魔法世界』の理屈によるもの、という可能性だ。

原作の知識と神様の話しが確かなら、彼女が吸血鬼の真祖にされたのは1週間ほど前、10歳の誕生日。

親は地方領主で、城で開かれた盛大な誕生会の中に吸血鬼に襲われ、呪いに掛かり吸血鬼の真祖となったはずだ。ハイ・テイルライトウォーカーしかも親を含め身内や参加者を虐殺されて。

もし下衆が『旧世界』側の人間なら、ただその事実を述べて、唯一不自然に生き残った娘の仕業、と述べればいい。

しかし結果は沈黙。

なぜなら下衆の根拠は、吸血鬼の真祖としての覚醒による強大な魔力の流れを感知したから……などというのはどうだろうか。ハイ・テイルライトウォーカー

突然の質問に、反射的に『魔法世界』の秘匿を行ってしまったのではないか。

少なくとも、この下衆から何かしら知り得ることができそうだ。

そんなことを瞬間的に考えていると・・・

「根拠ならある！」

別の下衆が突然叫び出した。

「領主様の城に多くの死体があった！こいつだけ生き残ってたんだ！こいつはお嬢様の姿を似せた化け・・・」

ザシュツ！

その先を下衆が話す事は無かった。

特に考えて動いた訳ではない。

ただこれ以上彼女を苦しめたくなかっただけ。

むしろ遅すぎたと後悔するくらいだ。

下衆がわめきだした次の瞬間には、下半身に気を流し張り巡らせる。

同時に足の裏と地面の間で気を爆発させて、一気に接近。

『高速移動術・瞬動』

10mほどの距離を一瞬で肉薄。

同時に右手で左腰から抜いた短刀に魔力を流し、日本刀・正宗に変形。

すれ違いざまにその首を切り落とし、彼女と下衆共の間に立つ。

ドサッ！

ようやく頭が落ち、続いて体が崩れる。

目の前の少女は、目を大きく見開き驚愕している。

いくら吸血鬼ハイ・デライトウォーカーの真祖といえども、なりたてのこの子にしてみたら、突然目の前に現れたようなものだ。

それとも、あっさり殺したことに恐怖されているかな？

そんなことを考えつつ、安心させるように、優しく微笑みかける。

より大きな驚愕、そして反射的に疑いの視線。

悲しいが、仕方ないことだとそのまま体を反転、下衆共の方を向く。

「「「うわああああっあああああ！」「」「「「ば、ばけも
のだ—————！」「」

少女に向けた、微笑みとは真逆の怒りの視線を向けると、6人が逃げ去る。

残り3人。うち2人の農民は、手に持っていたすきや鍬を振り上げようとする。

「遅い！」

再び瞬動を使い、2人の首を飛ばす。

斬り殺しながら、入念に自分の心を探る。

あの神様特製の部屋での訓練が効いたのか、躊躇も後悔も感じていない。

そこには、満足しつつ、最後の下衆と対峙しようと視線を向ける。すると聞こえてきたのは……

「『トレース・スピリトゥス・セラキエリチニス・サキテント・イニミクムプラクテ・ビギ・ナル！氷の精霊3柱、集い来りて敵を射て！
サギタ・マギカ魔法の射手・セリエス連弾・グラキアーリス氷の3矢！』」

やはり魔法使いだったようね。

それにしても3柱を撃っていないながら、最初の始動キーだったかしら？あれが初心者用のやつなのはどういうことかしら。

単発じゃないってことは一応学んではいるのだろうけど。

原作の基準、どうだったかしらね。3桁行ったらかなりのものだった気がするけど。

並の魔法使いは2桁くらいかしら。

などとのんびり考えていられるのも、気のお蔭。

反応速度や体感時間も向上しているおかげでこんな状況でも冷静に
思考できる。

実際、ただ避けるなら寝ていても出来るくらい余裕。

というか装備の自動防御たちで十分。マントの分すら越えることは
できないだろう。

でもこの後の色々な説明を考えると、ここで彼女に私の人外っぷり
を見せておく方が早いかもしれない。

また傷つけるかな？・・・そんな自分に苦笑と若干の怒りを覚える。

そんな感情を抱えながら、私は魔力を装備に流して、マントとロー
ブの自動防御を切る。

そうして・・・飛来する氷の矢を正面から受けた。

「え？・・・い・・・いやー！！！！！！」

ああ・・・また悲しませてしまったわね・・・つくづく情けない。

「はははははっ！正義の使者たる私の邪魔をするからこつなるのだ！」

見事命中させた下衆が何か騒いでる。

しかし気付かないのだろうか、ある異変に。

「ははははは・・・はは・・・は・・・ん？」

ああ、ようやくお気づき？まったく鈍いわね。

私は構わず後ろを振り返る。

「大丈夫よ・・・ごめんね」

そうして、驚愕に固まる彼女に微笑み、驚かせたことを謝る。

それにしても、つくづく度し難いと自分でも思うが、彼女が悲鳴を上げてくれたことに嬉しいと思う自分がある。

たとえ警戒していようと、自分を守ってくれた人間が傷付くのに反応して悲鳴を上げる。

そんな彼女の優しさが嬉しい。

そんなことを考えながら、目の前の下衆に意識を向ける。

口をパクパクさせて、言葉も無いようだ。

それもそうだろう。

なぜなら今の私は、胸と腹部、右太ももの3か所を氷の矢が貫通しているのだから。

ぶつちやけ、痛い。でもまあ、100年の特訓で痛みにも慣れた。

普通なら即死の状況で、さらに見せつける。

あいた左手で氷の矢を掴むと、3本ともぽんぽん抜いてしまう。

開いた穴から血が吹き出るが、それもすぐに止まる。

2人の目の前で傷が瞬く間に塞がる。

後ろの彼女の反応はわからないが、下衆はがくがく震えだした。

「彼女が吸血鬼だから、人ならざる存在だから殺すと言うのなら・・・
私も殺さなければならぬわよね？」

あえてクスクス笑いながら話しかける。

ドサツと音を立てて、下衆は尻もちをつく。顔面は蒼白、そのままずりずりと下がり始める。

「まあ、あなたの事情なんか関係ないのだけれどね。彼女の受けた苦痛、私の受けた苦痛、その代価は払ってもらおうわ」

「うわあああああああ！」

ザシュッ！ザシュッ！

私の言葉に、ついに恐怖が決壊した男は、そのまま四つん這いで逃げよつとする。

私が瞬動で前に回り込むと、そのまま両手を斬り落とし、蹴り上げ仰向けにする。

「ぎゃあああああああ！腕がああああああ！」

「うるさい」

そのまま顔を踏みつけ、無理矢理黙らせる。

「私の質問に正直に答えなけれ殺す。余計な事を話しても殺す。質問を終えたら・・・まあ『助けて』あげる。OK?」

踏みつけ話す私の言葉に、下衆はコクコク必死に頷く。

もう大丈夫かと、足を外して質問を始める。

「最初の質問。あなたは魔法使いね。どうして『旧世界』の、こんな所に？」

「見聞を広めるために旅をしていた。その途中で今回の件に遭遇したんだ」

「どうやって彼女が吸血鬼だと知ったの？」

「1週間前、ちょうど私は問題の起こった城の城下町に泊まっていた。そこで夜に突如強大な魔力が流れ溢れ出すを感じた。念のため朝まで待つて町の間人と共に城に向かうと、そいつ1人を残して全員死んでいた。人間の子供が起すには規模が大きすぎた。魔力の残滓も残っていたから吸血鬼だと思ったんだ！」

「たまたま居合わせ、相手が悪である吸血鬼だから殺そうと？」

「そうだ！・・・吸血鬼は殺す、普通の事だろ？なあ、もう話す事は何もないよ！頼む！助けてくれ！」

「ふん。まあ、もう聞くことはないわね。いいわよ」

「ほ、本当か！」

「ええ・・・苦しみから『助けて』あげる」

「・・・？」

「彼女が逃げたのは助かりたかったから。その彼女をあなたは助けようとしたかしら？」

「・・・！ま、まってくれ！」

「正義だ悪だと言葉を振りかざして、一方的に彼女を殺そうとした人間が命という意味で助けを乞えると思う？」

「お、お願いだ！」

「私の大好きな言葉にこんながあるわ。『殺していいのは、殺される覚悟のある奴だけだ』」

まあ、言葉は少し違うけど意味は同じだからいいでしょう。

彼の物語はかなり好きだったから覚えていて。

私みたいなチートバグキャラが行っても説得力は薄いけれど。

それでも私の覚悟から考えると、殺される覚悟くらいは当然持っている。

好きなように生きる、そのための障害を排除する、というのが往々にして反感を生むわね。中には恨まれる事態になるかもしれない。

その結果撃たれるかも、殺されるかもしれない。まあ、ただで殺されるつもりは毛頭ないけれど。

「な、なんでもする！だから・・・」

「私、約束は守る性質なの。だから約束通り、苦しみからは『助けて』あげる・・・もう用済みだしね。さよなら」

「まっ・・・」

ザシュツ・・・ゴロン

寝転んだ下衆の首を斬る。

転がった首の表情は恐怖に彩られていた。

それでも私の心には波風1つ立たない。

正直取るに足りない存在に、いちいち心動かされたりはしない。

それを確認できただけでも有益かしら。

……本格的に魔王化フラグかしらね。

埒もない事を考えながら、正宗の血を払い、短刀に戻して鞘に納める。

くるりと振り返り、少女を見つめる。

正直、今までの事は前座になりもしない。

彼女とのこれからの会話に比べたら、斬り殺した3人の存在なんて私にとっては路傍の石以下だと思う。

だからこそ頭を切り替えて望まなければならない。

彼女を1人にはしたくないから。

それがたとえ私の勝手だとしても、押しつけだとしても。傲慢だとしても。

これから彼女が歩む長き道。

1人では歩ませたくない、悲しませたくない。

否、それは私も一緒か。

ここでもし一緒に居る事を断られたら、600年ほど私も1人ぼっ
ちか。

むむむ・・・ますます失敗できなくなった。

さて、まずは何から話そうか。

そう考えながら、ゆっくりと彼女に向かって歩き出した。

第4話 出会い、歩み寄る者達・事情と理由と旅立ち（前書き）

前回のあらすじ

少女に悲鳴に駆けつける

下衆共をお掃除

第4話 出会い、歩み寄る者達・事情と理由と旅立ち

下衆共の掃除が終わった私は、振り返りゆっくり彼女に近づく。

5mほどの間を空け止まると、ゆっくりしゃがむ。

焦ってはいけない。

なぜなら彼女は、今も警戒し、こちらの一挙手一投足に目を向けている。

突如人ならざる者に勝手に変えられ、周りの大人達から言われの無い罪で追われ、訳も分からず逃げ出す。

10歳の少女が経験するには酷すぎる状況が、彼女の警戒心を形作る。

焦ってはいけない、急に動いて驚かせてもいけない。

そう心に刻みながら口を開く。

「大丈夫？」

「……………」

「私の名前はシルヴィア。吸血鬼では無いけれど……私も人以上の力を持つ、人ならざる者よ」

「……………」

「少し話がしたいの・・・よければ少し移動しない？」

そこまで話すと一旦口を閉じる。

なにもこんな血の匂いが漂う場所で長々と話はしたくない。

かといってそれより重要なのは彼女と一緒に来てくれるかどうか。

だからまずは彼女のアクションを待ってみる。

口を閉ざしたままの彼女。その表情は少なくとも思案はしていると思う。

まずは第一歩と言ったところか。考えもせず断られる可能性も無かった訳じゃない。

あくまで想像しかできないのが歯がゆいが、それだけ彼女の受けた心の傷は深いだろうと思う。

ふと思案する彼女の瞳が、私の左腰に差した短刀に向く。

「これが怖い？」

「・・・(コクッ)」

初めての目に見えるアクション。また一步前進。

まあ当然と言えば当然かしらね。あれだけの殺戮を見せつけたのだから。

そう思った私は、ゆっくりマントの裏地からリュックを取り出す。
何も無いところから取り出した私に驚く彼女。

私は「後で教えてあげる」と微笑むと、マントを脱ぎ、短剣と短杖を外し、マントと一緒に2人の中間くらいにゆっくり放る。

私の行動に困惑する彼女。

「私は貴女を決して傷つけない。その証として武器も預けるわ。」
視線を合わせ見つめながら、はっきりと告げる。

驚愕・困惑・歓喜・疑惑、と言ったところだろうか。

さまざまな感情がうずまく表情で、私と地面に放られた荷物を交互に見る。

やがてゆっくりと、一歩ずつ踏みしめるように歩き出す。

そうして私と彼女の中間辺りに放られた荷物を拾い抱きしめる。

その瞬間、彼女に聞こえないように抑えつつも、安堵の吐息を洩らす事は止められなかった。

まだ先は長いが、これで切っ掛けを作る事は成功したようだ。

「それじゃあ、移動するけど、いいかしら？」

「……(コケッ)」

そうして私達は歩き始めた。

しばらく歩くと、最初に目にした小川の脇に降りる事が出来た。

都合の良い事に、その近くで座るのに適した岩が転がっている場所も見つけた

他の旅人も利用したのだろう。岩の並ぶ中心には焚き火の跡がある。

それ自体は、だいぶ時間が経ったもののように、気を使って周囲を探っても人の気配は無い。

「……でいい？」

「……うん」

後ろから付いて来ていた彼女に尋ねると、小さいながらも答えてくれた。

たったこれだけの事が嬉しいと思う私は少々危ない人に思えてくる。同時に、原作の知識、そういった色眼鏡で彼女を見ることは危険だとも思う。

私が今ここに居るのは、原作の知識があり、原作の彼女が好きで、彼女を助けたい、共に生きたいと思ったから。

それが押しつけであれ、我儘であれ、私の本心。

でも、原作のエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと、目の前の彼女は違う。

そう再認識し、自分を戒めながら岩に腰掛ける。

リュックをあけ、竹の水筒を3本取り出すと、反対側におずおずと座った彼女にそつと差し出す。

「……?」

「これでも飲んで、少し待っていてくれる?私、薪になりそうなもの探してくるから」

「……あり……がとう」

おずおずと受け取りながら答える彼女に微笑みかけ、私はゆっくり立ちあがる。

それでもびくりと震え、こちらを見てくる彼女。

驚かせたかな？とも思ったが、どうやら少し違つようで。すぐに思いつく。

「大丈夫、すぐその、見える範囲で集めてくるから・・・いい？」

「・・・(コクッ)」

私の言葉にほつとしたのか、頷き緊張をほぐす。

それなりに心は開いて来てくれているかな、と思いつつ、話を続ける。

「そうそう、少し寒くなってきたから、そのマント羽織って待っていてね」

すでに日は傾き時刻は夕方ぐらい。周りの木々の紅葉具合から季節としては秋ぐらいだと予想。

場所は日本より北に位置するイギリス、まして元いた世界から見ても600年前なら、気候的に気温が低いかもしれない。

そう思い声をかけてから、森の脇に向かい枯葉や枝を集め始める。

薪を集めながらそつと様子を伺つと、おずおずマントを羽織つて環境快適の効果に驚いたり、勝手に自分サイズに修復されて驚いたり、水筒の中身がそれぞれ味が違うのに驚いたり、オレンジジュースが気に入ったのかごくごく飲んだり、中身が尽きないことにまた驚いたり、先ほどとは打って変わって年相応の反応を示してくれた。

はっきり言えば・・・何この可愛い生き物、である。

原作エヴァを誇り高き大口リツ子とするなら、目の前の彼女は年相応ピュアロリツ子だろうか。

そんなおバカな事を考えつつ、彼女の反応を堪能しつつ、集めた薪を持って戻る。

「あの・・・これ・・・中身が。それに・・・このマントも」

水筒を掲げ、訪ねてくる彼女。

「ええ、それも魔法の効果なの。中身は無くならないから好きなだけ飲んでいいのよ。魔法の事も気になるだろうけど、後でちゃんと説明するわ」

安心させるように微笑みかけると、薪の準備を始める。

既に前の旅人が残したおかげで石の竈が作られていたので、そこに必要なだけの薪を並べ、リュックから火打石を取り出して着火する。数回打つだけであっさり火種が着く。・・・確実に魔法の効果と思いさつと確認すると、ある意味予想通りで魔力付与がされていた。

明確な魔法ではなく、魔力付与。ようはとてつもなく火が付きやすいが分類上ただの火打石、と言うことだ。

まあいやとリュックに仕舞うと、今度は食糧が入った小分け袋を取り出す。

中には乾物と果物がごろごろ。あとは塩と・・・紅茶の壺。とりあ

えず、ステーキ見たいな大きさのビーフジャーキーと、魚の干物、リンゴを取り出すと袋をそのまま彼女に渡す。

「あんまり種類ないけど、好きなの食べていいから」

座っていた岩に干物とリンゴを置くと、リュックから鍋を取り出し川に水を汲みに行く。

別に水筒から入れてもいいのだけれど、汲んだ方が早いから行く。

そういえば、乾物と干物って別物だったかしら？スルメはどっちだろ。

どっちにしても、手軽な乾物系はこれから自作しなければならぬわね。

あの小分け袋、生モノでも腐る事はないよう魔力が籠っているけど、片手で食べられるのは捨てがたいしね。

肉は血抜き・解体・塩漬けた後燻製、魚は開いて内臓取り除いて塩漬けの後、天日干しで半日・・・だったかしら。

はぁ・・・元々、余程のものでない限り美味しいと思えちゃう味音痴のお蔭で、料理に興味無かったのがここで響くとはね。

神様に貰った一般常識も、全く知らないと思いだしにくいみたいだし。これは盲点だったわ。

そんな事を考えながら、ジャーキーを齧りつつ川で水を汲み戻る。

戻ってみるとそこには・・・小動物がいた。

頬いっぱい乾物や果物を詰め込む様は、リスやハムスターを想像させる。

この1週間、ほとんど飲まず食わずで、逃げていたのだろう。

少しは警戒を緩めてくれたのか、その分忘れていた空腹にさらされた、というところかしら。

私が戻ったのに気付くと、頬を染め、申し訳なさそうにおろおろする。

「いいのよ、おなか減っていたのでしょ？好きなだけ食べていいの。でも焦って食べると喉詰まらせちゃうわよ？」

安心させるように微笑みながら、水の入った鍋を火にかける。

そうして視線を戻すと、口の中のものを飲み込んだ彼女は、何かを堪えるように唇を結んでいた。

人間の3大欲求の1つ、食欲が満たされて、さらに安心できたのかな？

私はそっと立ち上がり、頬に手を伸ばす。

最初はびくりと震えた彼女も、その手から逃れはしない。

だから私は、ゆっくりと、慈しむように彼女の頬を撫でる。

私は彼女の頭を膝に乗せながら、万一に備え岩に座りながら眠った。そして目覚めると、目の前には彼女の可愛い寝顔。

豊かな金の髪は朝の光に輝く。

完成された西洋人形のような容姿は、今の私の姿とはまた違った美しさ。

今は閉じられている深紅の瞳は、白い肌にも映える。

着ていた黒のワンピースドレスは、逃亡中に所々裂けたのかボロボロだ。

それでもその美しさを損なう事はない。

そんな可愛らしい妖精は、穏やかな寝息と共に、未だ夢の中。

つい悪戯心が起きて、その頬をぷにぷにと突く。

そんな風に穏やかな時を過ごしていると、そのうち彼女も起きる。

「……………あつ」

「おはよう、良く眠れた？」

「……………はい、ありがとうございます」

挨拶を交わし問いかければ、体を起こし、頬を染めながら頭を下げ

る。

そんな彼女に微笑みかけながら、手を取り立ちあがる。

「どういたしまして。まずは顔洗って、ご飯食べて、話はそれからにしましょう」

そういうとリュックからタオルを取り出し、2人で川に向かう。

手を握れば、きゅっと握り返される。そんな感触を噛みしめながら。

「昨日は危ないところをありがとうございました。名乗りもせずすみません。エヴァンジェリン・マクダウェルです」

食事を終え、さあ何かから話そうかと考え出したところで、彼女は姿勢を正し、深々と頭を下げながら名乗り上げた。

親の賤の賜物か、10歳とは思えない堂々とした謝意と謝罪。

「いいのよ、あなたも大変だったのだから。それじゃあ改めて、私はシルヴィア。後で話すけどファミリーネームはないの。好きに呼

んでね。私は・・・エヴァちゃんと呼んでもいいかしら？」

「はい・・・えと、シルヴィアさん」

はにかみながら答えるエヴァちゃん。

でも、この後その笑顔を歪めてしまつかもと思うと心苦しい。

それでも事態の把握が出来た方が良くても事実だ。

「エヴァちゃん、さっそくだけど・・・何があったか、話せる？」

「!.....」

「無理に、とは言わないわ。ただ・・・」

「いえ、大丈夫です」

そう答え、まっすぐ見つめてくる瞳の何と力強いことか。

この子は本当に10歳の少女なのかと思えてしまう。

わずかに震える肩を見なければ、本気で疑ってしまっただろう。

「ただ・・・あの・・・」

そうして、私の隣に視線を向ける。それだけで何を願っているのか分かった私は手招きする。

ほっとして、隣に座ろうとしたエヴァちゃんを、私は抱き寄せ膝の

上に座らせる。そうして腕の中に抱きしめる。

「ひゃっ！」

「無理はしない事。いい？」

「・・・はい」

そうして語り出したところによれば。

彼女はやはり、とあるイギリスの地方領主の娘。ただし、血の繋がりはなく、預けられた身だそうだ。

実の両親は病ですでに他界。知人であった領主夫妻に預けられ、実の娘のように可愛がられていた。

血の繋がりが無い事は周囲にも公表されており、それでもなお、子供のいない領主夫婦に変わりにずれは婿を・・・などと話が出るくらい、認められていたらしい。

彼女も義理の両親に懐き、幸せに暮らしていたそうだ。

その幸せが崩れ、事が起こったのは彼女の10歳の誕生日。

途中、具合が悪くなり一旦部屋に引き揚げた後眠ってしまったそう
だ。

目が覚め広間に戻ると、そこは既に血の海。

中央に立っていた男の足元には、両親の亡骸。

そこから先は断片的な記憶しかないらしい。

覚えているのは、男の話し、男が自分に呪いをかけたという事、吸血鬼と言う単語、成功に酔った男が両親を足蹴にしたこと、そして・
・右手に残る血肉を断つ感触。

気付いた時、男の身体はばらばらになり、床に散らばっていた。

自分の力に、行った所業に恐れ慄く彼女。

しかし次の瞬間、窓からさす日の光が、いつのまにか朝になっていた事を知らせる。

このままではいずれ異変に気付かれる。

その時自分はどうなる？これだけの惨劇、1人生き残った自分の強大な力……

その時全てを理解していた訳でも、想像していた訳でもない。

ただ本能が、ハイ・デイルイトウォーカー吸血鬼の真祖として覚醒した生存本能・危機察知能力が、このままここに居ることの危険性に警鐘を鳴らした。

とっさに両親の手から指輪をはずすと握りしめ、すぐさま自分の部屋に向かい着替える。

逃げることは頭にあっても、それに適したような服装はなく、結局いつも着ているようなワンピースドレスを着こむ。

2つの指輪に紐を通し、首にかける。

その時、城の入り口で人の声がする。

もう気付かれた！

次の瞬間、彼女は駆け出し、正面とは別の入り口から城を脱出した。

その時、見られていないと思ったが、中を検分していたあのロープを着た下衆に姿を見られ、その後1週間追われ続け、昨日に繋がる
と言っわけだ。

……話し終え、震える彼女を抱きしめる。

「ありがとう……よく話してくれたわ」

聞いた限り、ほぼ原作と同じ流れだった。と言う事は彼女の復讐すべき相手はまだ生きている。

そいつの名は『造物主』ライフメイカー

後の戦争の黒幕にして、『魔法世界』を作った存在。

その辺を含めて、今度は私が話し始めた。

この世には、神と天使が治める『天界』、魔王と悪魔が治める『魔界』が1つずつ存在する。

そして、神や魔王が管理する『人間界』が無数に存在する。

私は元々別の人間界に存在していたただの人間。

それが神（魔王）候補として力をもらい、この人間界の管理にやってきた。

「それじゃあ・・・シルヴィアさんは、神様なんですか？」

「まあ・・・見習いみたいなものだけだね。急にこんな話して、すぐには信じられないわよね」

「いえ・・・シルヴィアさんが嘘をつく必要はないですし」

そうして笑いかけてくれるエヴァちゃんを抱きしめながら話を続ける。

今回私が介入した人間界は、そんな多数の中の1つで、ここは2つの世界によって成り立っている。

すなわち、普通の人が暮らす『旧世界』と、魔法が認知されている『魔法世界』だ。

『旧世界』の人間は『魔法世界』に存在せず、魔法の存在も知らない。

逆に『魔法世界』関係者のいくらかは、『旧世界』にも存在している。

昨日の、ローブの下衆がそれに当たる。

そして、エヴァンジェリンが掛けられ、その存在ごと作りかえられた呪い。覚醒したそれは吸血鬼の真祖ハイ・テイライトウォーカーと呼ばれる種。

一般的な吸血鬼の弱点とされる日光や流水を克服した上位種。不老不死と圧倒的再生能力、闇の眷属故の膨大な魔力から、『旧世界』『魔法世界』問わず最強種の1つとされている。

不老不死故に老いることも、死ぬこともない種。孤独を抱き続ける存在。その呪いを解く手段がない事も話す。

またその呪いを掛けた存在、すなわち造物主ライフメイカーはまだ生きている可能性も話す。

「・・・そっか、私、本当に化け物になっちゃったんだ」

そう寂しそうに話す彼女を抱きしめずにはいられなかった。

「・・・そんな言い方しない方がいいわ。・・・私は、『人ならざる者』って言う事になっている」

「『人ならざる者』？」

「ええ、人以上の力を持つ、人以外の存在。その方が、化け物よりは響きがいいでしょ？」

「くすくす、シルヴィアさんは神様ですけどね」

「あら？魔王になる可能性もあるわよ？」

気分を変えるためにおどけた会話を続けながら、神と魔王の違いを話す。

もちろん、色欲に溺れれば魔王に・・・などと話せないので、出世欲や金銭欲に置き換え、本能や欲望に忠実だと魔王や悪魔よりの存在になる事、そこでの正義と悪が一義的ではないことも説明した。

そうして話を聞いていたエヴァちゃんがおもむろに、そして意を決したように問いかける。

「それで・・・シルヴィアさんは、なぜ私を助けてくれたんですか？」

「私は、エヴァちゃんが良ければ一緒に旅をしたいと思っている」

その私の言葉に目を見開き驚く彼女。その瞳が揺れる。

そんな彼女に話を続ける。

『人間界』には、目的や理由となる『物語』が存在する。その『物語』が他の『人間界』に、娯楽と言う意味での『物語』として存在する場合がある。

これを原作と言い、この『人間界』の原作が、かつて私が居た『人間界』に存在した。

「！それじゃあ……」

「ええ、その中にエヴァンジェリン・マクダウエルという人物も登場していた」

その事実にも更に驚くエヴァちゃん。

ここで誤解を与えないように一気に続ける。

「私は原作の中のエヴァンジェリンが好きだった。そして、その原作を基にしたこの『人間界』に来ると分かった時、彼女を救いたいと思った。彼女も、不老不死として、孤独に苦しんでいたから。そして私は貴女の前に現れた……だけど気付いたの」

そこで私は彼女を抱き寄せ、その瞳を真正面から見つめる。

昨日、決して傷つけないと誓った時のように。心が伝わるように。

「今日の前に居るエヴァちゃんと、原作のエヴァンジェリン・マクダウエルは違う。私はこの人間界に来る前に決めた事があるの。それは『私は、私と私の大切な者のために生きる』と言うもの。その私が、今、守り一緒に旅をしたいと思っているのは原作の彼女ではなく、目の前のエヴァちゃんだから」

そこまで話した私は、一旦口をつぐむ。私も彼女も、視線をそらさず見つめ続ける。

「もし……嫌だつたり、時間が必要なら……」

「行きます」

すこし間を置こうか……そう続けようとした私に、エヴァちゃんははつきりと続けた。

その時になってようやく、私は緊張していたことに気付く。

震える手をそのままに、彼女の頬に当てる。

「いいの？」

「はい……さつきも言ったけど、シルヴィアさんは嘘をついてないと思う。その必要もないし、真っ直ぐに私を見て話してくれたから……それに」

そこで私の手に自分の手を重ね、今までで一番の笑顔を浮かべる。

「もう1人は嫌だから……シルヴィアさんと一緒なら、私、笑えると思う。きつと楽しい。だから……私も、一緒に連れて行って下さい」

その言葉の後に、瞳から涙を流したのはどちらが先か。

「ええ、一緒に行きましょう。2人で、ずっと一緒に」

「はいっ」

わからぬまま、2人は微笑み、涙を流し、抱きしめあう。

2人の心を包むのは安堵と歓喜。

暖かな日差しの中、2人は共にある幸せと温もりを噛みしめながら抱きしめあつた。

あの後、随分話し込んだことと、抱きしめあつたまま落ち着くまで待った事で、太陽の位置はすっかり真上、正午になっていた。

昨日の今日で、この辺までなら追手が来るかもしれないと、とりあえず南へ向けて、2人は旅立つことにする。

理由は特になく、暖かい方へ向かうという意味で。

それとなくエヴァの住んでいた城まで、思い出の品などを取りに戻る事も示したが、本人があっさり却下。

胸元の二つの指輪を握りしめ「私には両親のこれと、シルヴィアさんがいるから、大丈夫」と笑顔で言われて抱きしめたのは少し前の事。

なんとなく、自分のキャラが壊れていると思わないでもない。

さつきも、まさか自分が泣くとは思っていなかったわけで・・・感情移入はしていたけども。

まあ、それでもいいかと切り替えた私は、隣でオレンジジュースをちびちび飲みながら歩くエヴァちゃんに爆弾を投下する。

「エヴァちゃん、今日から私達、義理の姉妹って事にしようと思うんだけど、どうかしら?」

「!!!!ケホツツケホツ!」

うむ、予想通りの反応。そして咳き込む姿も可愛らしい。

・・・シスコンフラグ? ナニソレオイシイノ?

そんなおバカ会話を脳内で交わしていると、エヴァちゃんが再起動。

「いきなりどうしたんですか?」

若干恨めしげに、しかし頬を染めつつ上目遣いのエヴァちゃん。

・・・うむ、これは強力です。

「女の2人旅はそれなりに目立つし、せめて関係ぐらひはあり得るものにしようかなと思って。」

実際問題、あまり注目を浴びるのは得策じゃない。どうせ目立つにしても理由と関係の2つの好奇で目立つより、理由だけで目立った

方がまだまし、という程度だけだね。

服装、というかマントとかのほづが目立つかな〜とか思うけど気にしない。

「・・・そう言う事なら是非。よろしくお願いしますね、シルヴィア義姉様」

「!!!!ケホツツケホツ!」

水を飲もうと口を付けていたら、なにやらかなり上機嫌な声で聞こえてきたエヴァの口撃。

効果?もちろんクリティカルですがなにか?

「エヴァちゃん、いえエヴァ、あなたね〜」

「ふふっ、さっきの仕返しです」

じ〜っと見つめ合う2人はやがて同時に笑いだす。

そうして、ちらちら見ていた手を差し出して、2人で手を繋ぎ歩き始める。

これからの長い、とても長い旅を、2人で一緒に。ずっと一緒に歩んでいく。

第5話 シルヴィア姉様の教育方針と、不老の解除（前書き）

前回のあらすじ

エヴァと邂逅

事情説明

義姉妹になる

第5話 シルヴィア姉様の教育方針と、不老の解除

皆さんごきげんよう、シルヴィア・マクダウエルよ。

エヴァと義姉妹の関係となり、旅を始めて半日。

時刻はすっかり夜で、私達は今夜も野営をしている。

焚き火の脇に広げた敷物の上に寝転がる私。

腕の中には、もちろんエヴァ。

ちなみにエヴァの今の格好は、私と同じ。

ボロボロのワンピースを仕舞い、代わりに私の予備の服装を着せてみた。

マントと一緒に、勝手にサイズを調整してくれた。

ホットパンツから延びる、素足をさらす格好に恥じらうエヴァの姿もたっぷり堪能したわ（キリッ）

そんな訳で上から下までそっくりの格好な私達。

唯一違うと言えば、私の腰に刺さった短杖・短刀。

今日の昼、預けていたのを義姉妹となった時に返された。

忘れていたと言うのもあるが、私の方が扱えると言う事で。

マントのお蔭で快適に寝る我が義妹。まあ、焚き火は獣避けのため
すやすや眠る彼女を眺めながら、今後の事を考える。

とりあえず、今回の心の傷が癒えるまではたっぷり甘えさせてあげ
よう。

ただでさえ、親を失ったのだから。せめて、完全な代わりとはいか
なくても、それに匹敵するくらいの愛情を注ごう。

傷が癒えたら、徐々に自立させる。寄り添う事はよくても、依存は
よくない。・・・お互いに。

それぞれが自分の足で立つことで、はじめて共に歩むことが出来る
のだから。

徐々にそつなる事ができたらいい。

次に、彼女の力をどうするか。

私にしる、エヴァにしる、どうあっても戦う事からは逃れられない
だろう。

先日の、自称正義（下衆）の魔法使い（嘲笑）がいい例だろう。

彼女が積極的に戦うにしる、極力避けて身を守るにしる力は必要だ。

・・・と言っても、まだ早い話かしら。エヴァは10歳になったば
かりなのだから。

当面は、護身が出来る程度に体や技術を鍛える。その間は私が守る。それでいいだろう。

数年経って、彼女が精神的に成熟した時、彼女が自分自身でどういった覚悟・決断をするか。

どういった決断であれ、私は受け入れる。

戦うのなら共に戦う、逃げるのなら私が守る。その違いだけ。

私がエヴァと共に在るのは変わらないのだから。

私が覚悟を決めるのに約1年、体に染み込ませるのも含めて約10年掛かった。

その基準で言えば、まずはエヴァが20歳になるまで見守るとしよう。

過保護と取られるかもしれないが、これが私の限界だ。

私は私の幸せのために力を使う。

私の幸せの1つは、エヴァが幸せになる事。

エヴァが、そして私が幸せになるために、私は力を使う。

「あなたは、あなたの好きに生きなさい・・・どんな道であれ、私は共にいるわ。それが私の幸せ」

エヴァを抱きしめながら、いつの間にか口にする言葉。

言葉にすることで、それは自ら誓った誓約のように心に収まる。

彼女の額にキス。全身に気を巡らせて周囲の警戒をしながら、睡魔に身を任せ、瞳を閉じる。

……周囲にばかり気を向けていた私は、腕の中で動く彼女に気付くことはなかった。

そして翌朝、頬を赤らめ、きよろきよろと挙動不審なエヴァに、首をかしげるシルヴィアが居たとか居ないとか……

1週間後

追手から距離を取り行方をくらませるために、この1週間はほとんど歩きっぱなしだった。

と言っても、服やブーツの体力回復や加速の効果で、疲れ知らず+かなりの距離を稼げた。

それに、合間に携行食料を作るのに挑戦したり、1度は賊が襲って

きて蹴散らしたりもした。

食糧作りには魔導書が大活躍。獣の捌き方や下処理・調理方法などもばっちり記載。グール先生もびっくりの情報量。もはや魔導書と言つより百科事典クラス。それでも魔法が載っているので魔導書と呼ぶ。

鳥以外の肉は燻製、魚は開いて干物に。鳥は血抜きして食糧用の小分け袋にそのまま入れる。

森に生えているキノコや野菜と煮込むと、良い鳥ガラスープになるのだ。

歩きながら野菜・果物を採集することで、食糧事情も随分改善された。

そんな風にながら距離を稼ぎ、そろそろ頃合いかと昨日は深い森の中で野営をして今日に備えた。

朝目覚め、敷物や焚き火の後始末をしようとしている義妹に声をかける。

「エヴァ、今日は旅に出ないからそのままでもいいわよ」

「何かするの？」

そう尋ねるエヴァに私はリュックから魔導書を取り出し見せつける。

「エヴァの不老の解除よ」

そう告げると大きく目を見開いた。

目を閉じ集中。意識をお臍の下、丹田に向ける。

そこにある魔力の塊を、腕に流し始める。

この1週間、歩きながら、あるいは暇さえあれば魔力の流れを意識し、全身に巡らせた。

そのおかげで、気の通り道である気脈に対して、魔力の通り道である魔脈の拡張が大分進んだ。

集積地の事は、面倒なので気・魔力共に丹田と呼ぶことにした。

気の扱いで大分コツを掴んでいたのか、すぐに魔力でも、気と同じように身体強化が出来るレベルに到達した。

あの100年は一体・・・と思わなくてもないが、そのおかげですぐに上達したのだから文句も言えない。

腰から短杖を抜き、魔力を流すことでヘルメスの杖を現す。

そのまま魔力を集中、先端の水晶を中心に魔力の塊が出来始める。水晶を中心に、バスケットボールくらいの魔力が溜まると、今度はその維持だけに流す。

そうして今度は、魔導書に記載された通りに、魔力で地面に魔法陣を形成する。

描き始めた途端、魔力がどんどん吸収されるのを感じて、急いで魔力を供給する。

全てを描き終わるとようやく一息つける。慣れていないせい集中と魔力の供給でそれなりに疲れる。

地面に焼き付けられた魔法陣は、風や足跡で消えること無くそこに定着している。まずは成功のようだ。

「義姉様？」

脇に控えていたエヴァが、水筒とタオルを差し出してくれる。

さすが我が義妹、と気配りに感心し、礼を言ってから受け取り喉を潤す。

同時に魔導書に目を通し、もう一度魔法陣と内容を確認をする。

今回私が初めて描いた魔法陣は、神様が魔導書に記してくれた、エヴァの不老を一時的に解除するためのものだ。

「この後はどうするの?」

「少し文字を追加した後、エヴァが魔法陣の中央に立って、私が呪文を詠唱する。そうすると魔法陣からエヴァに鎖の様なものが出る。それが呪いを示すらしいわ。」

「鎖・・・」

「痛みとかはないみたい・・・不安?」

「ううん、平気。それで?」

エヴァをつぶさに観察しても、動揺や不安は見られないので話を続ける。

「呪いが鎖として現れた後、私が直接その鎖を引きちぎる。それで不老の呪いは一時的に解ける」

「一時的?」

「追加する文字の効果よ。年単位で、どれだけ呪いを解除するか決めておくの。5と刻めば、5年間は体が成長するけど、そのあとは鎖、つまり呪いが修復され不老に戻る、ということね。」

「ううん、義姉様の身体も不老不死だよな?何歳にしたの?」

「私はもともと、生前が22歳だったから、そのままにしたわ。姿は変えたのだけだね。」

「じゃあ、私は10年にする。そうしたら私の身体は20歳で不老

になって、いつまでも義姉様の義妹で居られるもの」

そう言い、ニコツと微笑む彼女を、私は抱きしめずには居られなかった。

「義姉様？」

「ごめんなさい。この方法じゃ、不死の方は治せないの。使う魔力が大きすぎて私ですら足りない。それにエヴァの不老不死が世界の存続に関わる事、そして吸血鬼の真祖ハイ・テイライトウォーカーと言う種そのものが、この人間界の根幹に根ざしている以上、無理に治そうとしても世界が介入して邪魔をする……ごめんなさい」

如何に地球5個分の力を持つと、相手はこの世界、人間界そのものの。

正面からぶつかれば、惑星どころか銀河すら手中に収める世界にはさすがに適わない。

恐らくだが、原作開始前に主人公である薬味をどうにかしようとしても、かなり強力な介入が予想される。

物語が始まらなければ、終える事が出来ない。それでは人間界としての存在理由が満たせない。

それだけならまだしも、エヴァの呪いは吸血鬼の真祖ハイ・テイライトウォーカー。

それが世界の根幹に根ざしているため、原作開始後に呪いを解こうとしても、それすらも拒否される。

自分の無力感に沸々と怒りが沸き起こる。

如何にどうしようもないことだとしても。これだけの力を得てなお、目の前の義妹1人救えない。

そんな怒りに飲み込まれそうになる私を、エヴァは正面から抱きしめる。

「謝らないで、義姉様。そんなこと言わないで」

「え？」

「確かに最初は、悲しかったよ？人以外の存在になっちゃったんだって。でも今は感謝する事も出来るの」

「感謝？」

そう問いかける私に、エヴァは顔を上げまっすぐ見つめてくる。

いつか私が、彼女に心を伝えようとした時のように。

「この呪いのお蔭で、私は義姉様に会う事が出来た。この呪いのお蔭で、義姉様と一緒に歩くことが出来るんだから」

そう言い放つ彼女は、本当に10歳の少女なのか疑う。

それくらいの力強さを持っていた。

すると一転、おどけた悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「もちろん、私に呪いをかけた造物主とかいう人には、きつちり仕返しするけどね。父様や母様、皆の仇も取らないとね」

そうやって笑みを浮かべる彼女を眺めていると、私も笑みを浮かべる。

まったく、自分の弱さが恥ずかしい。

精神的には100年以上生きているはずなのに、まだ10年しか生きていない義妹に教えられるなんて。

エヴァ自身、呪いや両親の事含め、まだ完全には割り切れてないはずなのに。

守る側であろうとした自分の方が氣遣われている。

情けない自分に苦笑しつつ、次から氣をつけようと、これもまた寄り添う関係の1つではないかと、氣持ちを切り替える。

「そうね………ありがとう」

そう微笑み、抱きしめる。

エヴァも抱きしめ返してくれる。

それはまるで、これで良いのだと伝えているようだった……

しばらくして、落ち着いた私は儀式を再開する。

エヴァの願いどおり、10の数字を魔法陣に刻み、エヴァを中央に立たせる。

「いくわよ・・・いい？」

「うん・・・」

さすがに若干の緊張を見せるが、儀式を続行する。

「『我、汝が背負いし魔を払う者！今ここに我が命ず！汝が魔を眼前に現せ！』」

膝をつき、魔法陣に手を触れながら魔導書に記された通りに詠唱する。

神様直々の魔法のせいか、始動キーはなかった。

そうして唱え終わると、魔法陣が強く発光。

そして陣のいたるところから、エヴァに向かって鎖が伸び、体に絡まる。

その数10本。

「エヴァ、大丈夫？」

「うん、私は平気・・・でも体は動かせない」

そうして鎖の絡まった体を動かそうとするも、びくともしない。

・・・一瞬、不埒なことを考えたりなんかしてないわよ？

ともかく、光が収まると私はさっそく鎖の1本を手取る。

全身に魔力を流し、強化する。

もともとの魔力量が、人基準では人外なために出来るこの儀式。

体にもどんどん魔力を流し、力で無理やり引っ張る。

「・・・あれ？」

そこにはぼろぼろの鎖。

なんだか拍子抜けするくらい簡単に壊れた鎖が手にあった。

ふとエヴァに視線を向ける。

「・・・」

「・・・」

なんとも気まずい空気を無視するように、他の鎖に向かった。

「これで10年間は、普通に成長するんだよね？」

私と一緒に隣を走るエヴァがそう問いかけ、私は頷いて答える。

あの後、あっさり全ての鎖を破壊した私達。

これでエヴァの不老は一時的に解け、10年後までは成長を続ける。

その後は不老に戻り、ずっと20歳のまま、という訳だ。

私達はそのまま1日過ごす予定だったのだが、すぐに片付け旅立った。

と言うのも、儀式中に使った魔力が思ったより大きかったので、近くに魔法使いがいればばれた可能性に思い至ったのだ。

そこですぐさま移動を開始。

ブーツの加速付与も利用して、すでに大分距離を稼いだ。

時刻は夕方近くになっている。そろそろ今夜の野営地を決めないと、そんな事を考えていると、隣のエヴァが私を見ている事に気付く。具体的には私の胸を、だ。

「ふふっ、羨ましい？」

マントから覗く、ローブを押し上げる胸。

その胸を持ちあげからかう……

「うん……私も義姉様みたいに綺麗になれるかな……」

つもりが義妹のピュアな口撃にあっさりやられました……やるわね我が義妹よ。

「ええ、エヴァならきつとなれるわ。体の成長は大体15歳くらいからかしら。個人差で前後もするけどね」

そう……成長する事ができるのだ。

それだけでも、いいのではないか。

何もかも私が背負い込む必要はないのだ。

今の時点ですでに、ただ守られているだけの存在ではないのだ、この義妹は。

だから私も、自然でいればいい。

気負うことなく、自然に2人で歩いていけばいい。

そんな事を思いながら、エヴァと共に走り続ける。

第5話 シルヴィア姉様の教育方針と、不老の解除（後書き）

展開が遅い？ 終わり方がマンネリ？

キノセイダヨ？

第6話 シルヴィア先生の魔法講座（前書き）

前回のあらすじ

エヴァの今後の教育方針と覚悟

エヴァの不老の解除

第6話 シルヴィア先生の魔法講座

皆さんごきげんよう、皆の義姉様・シルヴィアよ。

我が義妹・エヴァの不老を解除し、行方をくらませるために走り去り数日。

そろそろ良いかと適当な森を見つけ、その中心地で野営をしたのが昨夜。

起きて顔洗ってご飯を食べて・・・出発の準備をするエヴァに声をかける。

「エヴァ、今日は旅に出ないからそのままでもいいわよ」

そう言くと、エヴァは可愛らしく首をコテンと傾げる。

うむむむ、今日も我等の最終決戦兵器は絶好調のようね。可愛いわ。

そんな事を思っていると、今度は「うん」と悩みだした。

まあデジャブを感じるのも無理はない・・・

「コピペ?」

・・・・・・今日も我等の最終決戦兵器は絶好調のようね。

義妹よ、電波受信のスキルを得たの?それは頭に太陽の塔みたいな人形乗せてないとダメよ?

そんな義姉妹のじゃれ合いを終えると、敷物の上で、正座で向き合う。

最初は戸惑ったエヴァも最近は慣れてきた。

二人の間には魔導書を置く。

「さてエヴァ。突然だけど、今日から修業を始めるわ」

「修行？」

「ええ。私達が旅をする上で、どうあっても危険からは逃れられない。それは突発的な賊だったり、私達の力を恐れ、人ならざる者として害そうとする魔法世界の関係者だったり。」

「・・・」

「積極的に戦うにしろ、逃げるにしろ、身を守るための力が必要だわ。そのための修行よ」

「……うん」

「と言っても、しばらくエヴァは修行するだけ。実際に戦うのは私よ」

「え？」

「よく聞いて、エヴァ」

そこで言葉を区切ると、エヴァの肩に手を乗せ正面から見つめる。

「力には選択の責任が伴い、それを受け止める覚悟が必要よ」

「責任と……覚悟」

「そう。なぜ力を使うのか？それを使うことを選んだとき、力を使った結果に対する責任。そして、その結果を受け入れる覚悟がね。」

「……」

「私は、私と私の大切な者のために生きる。そのために力を使う。そういう覚悟を持っている。その為に必要ならいくらでも力を使う。邪魔する人間を殺す事も躊躇しない。」

「たとえば、エヴァ1人と無関係な人達1000人、どちらかしか助ける事ができないなら、私は迷わずエヴァを救う。その結果1000人の人間が生きようが死のうが構わない。そして、見捨てた1000人や、その身内から恨み辛みその他の責めを向けられたとしても、私はそれを認め、負う責任と覚悟がある」

「……」

「勘違いしないで欲しいのは、それら全てはエヴァのためだけど、エヴァのためだけじゃない。私自身のためでもあるの」

「義姉様の？助けられるのは私なのに？」

「そうよ。私の幸せはエヴァと共に在ること。だから、私は私のために力を使っていることになる。それに私は、人殺しの理由を義妹に押し付けるつもりはない。あくまで私の幸せのため。そして、私にとって無関係な人間なんて路傍の石以下の存在。そんな存在のために命を懸けて謝罪するような、『責任を取る』なんてことはしない。私の言う責任とは、あくまで自分が行った行動の結果を認め、受け入れ、背負う事。『責任を負う』と言う事よ。・・・そうして責任を負いながら、私と私の大切な者のために力を使う。それを貫くのが覚悟よ」

「・・・」

「力を身に付けるのと同時に、私の言った事も、考えてみて頂戴」

「うん・・・」

エヴァを見つめれば、私が一気に語った事を必死に考え、心に刻み込んでいる。

・・・いつかは、彼女も決断するのだろう。

しかし・・・たとえそれが無理だとしても・・・もうしばらくはその時が来ないで欲しい。

義姉の立場としての勝手な思いを抱きながら・・・義妹を見つめていた・・・

少し時間をおいてから、今日の本題に入った。

「最初に、修行の方針を伝えておくわ」

「方針？」

「ええ。これから私達は、魔法に加えて体術・剣術、それとそれぞれ別々の技術を1つ習得することを目指すわ。それも同時進行で。」

「一杯だね・・・それよりも別々の技術って？それに同時進行？普通は1つを極めてからじゃないの？」

「最初の3つは基本戦闘に外せないとして、それぞれ違う事が出来た方が戦術・戦略としての手札も増えるでしょ？同時進行は、魔法を極めている途中に魔法が効かない相手が出てきて困った、なんて事がないように。まあ、当面は私が戦うのだし、私の場合、剣術は多少かじっているから、魔法から極めてもいいのだけど・・・時間は有効に使わないとね。私は魔法具作成に興味があるのよね」

「なるほど。別々の技術か……あ、これ」

そう言いながら魔導書、もといグール辞書のページをめくっていたエヴァの手が止まる。

そこに記されていたのは『人形使い』のページ。

「これ、おもしろそう」

エヴァの視点から言えば魔法で人形を動かすファンタジックな物だらうけど。

私としては世界の、物語の力を思わないでもない。

「まあ、決めるのはすぐじゃなくても良いから、気に入ったのを探すといいわ。今日は魔法を基礎から学ばわよ」

「うん！」

そう返事をする義妹と共に、魔導書をめくっていく。

それによるとこうある。

魔法とは、世界に満ちるマナを体内で魔力に変換。それを精霊に渡すことで魔法として具現、行使する。

変換するのは丹田で間違いない。世界に満ちる、の意味は、生きとし生けるものが持っていると言う事。命とも取れる。だからこそ人が食事や睡眠を取る事で、魔力の回復を図る事が出来る。

こうして見ると、生命力による『気』が人の内部的の力とするなら、外部の物を食する事でも得ることが出来る『マナ』魔力』は外部的な力と見る事が出来る。

次に書かれているのは魔力障壁について。

魔法使いの基本的防御手段。文字通り魔力を込めることで盾として形成。便利なのは、一度作れば自ら破壊するか他者に壊されるまで勝手に展開されている点。作る時だけ魔力を消費するのだから、自動防御が可能と言うことだ。防御力は本人の練度と込めた魔力量に左右されるようだ。

「これは重点的に行うべきね」

「防御の方法なのに？義姉様にしては意外かも」

・・・義妹にどう思われているかの一端が見えたようだ。

それは置いておくとして・・・

「障壁を磨けば、それだけ魔力制御を磨くことにもつながるわ」

「魔力の制御？」

「ええ。たとえば制御力が低いころは、10の固さの盾を作るのに20の魔力を使ってしまう。でも制御力が上がれば、10の盾に対して8の魔力で済むようになる・・・どっちがお得かわかるわね？」

「そっか・・・だから制御力は重要なんだね」

「それにね、エヴァ。・・・力を制御できない者は、力に飲まれるものよ」

「力に・・・飲まれる？」

「ええ。自ら振るう力に滅ぼされるの。だから力を振るう時には、それ以上の制御する力と制御する心、理性を持たなければならぬ。」

「制御と、理性・・・」

「ええ、覚えておいて」

「うん・・・」

義妹に語りながらも、内心は自分自身への戒めでは無いか、と苦笑する。

私自身の経験では無いが、過去歴史上から学んだのも事実。

自らの幸せのために振るう力で滅ぼされれば世話はない。

そんなことにはならない・・・させない。

そつ心に刻みながらページをめくる。

次に書かれていたのは、魔法の具体的な体系についてだ。

威力の低い方から、詠唱魔法・術式魔法・術式詠唱魔法、となるらしい。また、この体系とは独立して無詠唱魔法と言うのも存在する。詠唱魔法はもともと基本的な魔法で、原作にもあるように始動キーから始まり、呪文を詠唱することで発動する。

術式魔法は、魔力によって魔法陣を形成し、その中で特定の鍵となる行動⇨陣の中に入る・陣の中で魔法を使う、などから発動する。畏に近い魔法だ。

術式詠唱魔法は、文字通り2つの体系を合わせたもの。魔力で魔法陣を形成し、詠唱によって魔法を発動となる。

無詠唱魔法は、これらの体系の中で詠唱を破棄して魔法を発動する事を言う。基本的に詠唱破棄の効果で本来の魔法より威力は落ちる。

しかしながら、これら4体系すべてに言えることは、魔法使い本人の技量⇨制御力によって威力は左右されると言う事。

技量1の魔法使いが放つ術式詠唱魔法と、技量10の魔法使いが放つ詠唱魔法なら、後者が勝つ。

技量10の魔法使いが放つのが無詠唱魔法でも同じ結果になる。

こうして見ると、やはり魔力制御の重要性が伺える。

間違ってもくしゃみ一つで服を吹き飛ばすような奴を魔法使いとは言わない。

誰の事とは言わないわよ？

そんな事を考えながら、エヴァには更に噛み砕いて説明。制御力の重要性を強調する。

元々聡明なエヴァもどんどん吸収していく。

そうしてよいよ具体的な魔法が記載してあるページに辿りつく。

「・・・？」

「どうしたの、義姉様？」

「いや・・・ちよっとね」

魔法の記述は、最初に生活にも使うような基本魔法が載り、その後属性ごとに並べられ、何ページにも渡って書かれている。

この世界の属性は8つ。火・氷・風・土・雷・水の6属性（左から右に強い関係を持つ、水は戻って火に強い）と、反発しあう闇と光の2属性を合わせたものだ。

ちなみに、エヴァが原作で作り上げた『闇の魔法』と『闇属性魔法』

は別物のようね。

とりあえず基本魔法は覚えるとして飛ばし、記述は火属性、基本の『魔法の射手』から始まっていた。

それはいいの。問題は別よ。

『火属性下級魔法・ファイア』

………はい？

何故ここにFF魔法が？ネギまの世界に？

混乱しかけた私は、しかしある事を思い出す。

それは神様の言葉。

「『うむ、いくつかの要因が混ざり合った結果、原作にある事が無かったり、逆に無い事があったりするようじゃな。』」

これか！今まで原作通りだったから油断していたわ。

でもまあ、FFは好きだし、いいかとあっさり切り替える。

それにFFの魔法が使えると言うのはなかなか心に響くものがある。とりあえずおいといて、それぞれが得意な属性を見極めることにする。

これには『魔法の射手』を使う。

単純に1の矢を撃てるかどうかで適性がわかるらしい。

結果は・・・

私：全属性（特に雷・闇）FF魔法

エヴァ：氷・闇

・・・全属性って・・・そりゃチートだけでも。

エヴァは原作通りだった。ちなみにFF魔法は下級を一通り試してみたが駄目だった。

FF魔法は私だけと言う可能性もある。なにせ世界の外からやってきた存在なのだから。

「とにかくこれで決まりね。魔法は基本魔法と魔法の射手に集中。私は雷と闇、エヴァは氷と闇ね」

「制御力を上げるため？」

「そうよ」

早い話、制御力を上げて魔法の射手で弾幕を張れば、力押しで大抵の魔法使いは行けると思う。

ただでさえ私のチート魔力に加え、エヴァはハイ・デライトウォーカー吸血鬼の真祖としての膨大な魔力。

弾幕そのもので倒せなかったとしても、その際に接近して斬り殺せ

ばそれで済む話。

当面はこれでいいわね。

「それじゃあ、さっそくはじめましょうか」

「うんー」

そうして私達は、魔導書片手に魔法の修行を始めた。

第6話 シルヴィア先生の魔法講座（後書き）

エヴァのシルヴィアに対する呼称を義姉様に修正しました。ねえさま、です。ぎしさま、ではありません。あしからず。

次回更新は少し間が空きます。申し訳ありません。それでは、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1012y/>

吸血鬼の真祖と神（魔王）候補の転生者

2011年11月7日08時15分発行